
砂漠の鐘

昴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂漠の鐘

【Nコード】

N3258S

【作者名】

昴

【あらすじ】

砂漠の真ん中にある大国、ヘスペリデス。

栄華を極めていたヘスペリデス王国はある日、突然の砂嵐によって崩壊する。

生き残ったのは唯一の王子マーデルスと、王国の近衛騎士団団長とその息子、3人のみ。

火竜と呼ばれる怪物の伝説が残る大砂漠で、

3人は王国を取り巻く陰謀に巻き込まれてゆく。

砂漠を彷徨い歩く3人の目的はただひとつ。
盗まれてしまった、砂漠を守る“砂漠の鐘”を取り返すこと…。

- - - - -
- - - - -

現在、第1章終了。

続きはHPで先行して更新しています。

先が気になるとおっしゃってくださいる方がいらっしゃいましたら、ぜひ遊びにいらしてください。

STARRY SKY 「砂漠の鐘」ページ

<http://www.geocities.jp/pleiadess0428/novel104.htm>

第2章 10幕まで更新済

プロローグ

辺りに見えるのは、ひたすら砂、砂、砂。ところどころに飛び出した岩が、月光を反射して銀色に輝いている。山のように連なる砂の広野に、影が3つ。動いていた。

「お気をつけ下さい、王子。いつ何時、敵に見つかるやもしれませぬ」

一番大柄な男が、バスの声でいかにも由々しいことであるように言った。臙脂色のマントとフードですっぽり身体を覆い、口元にもマフラーがあるけれど、その下に鍛え抜かれた強靱な身体があることを見て取れる。太い眉と同じ黒髪が、フードの隙間から垣間見える。「大丈夫です。それにもし敵とまみえることになれば、私も戦うとしましょう。団長ひとりに荷を負わせるつもりはありません」

王子と呼ばれた青年は、静かにうなずく。こちらこそろつた臙脂のマントとフードを身につけているが、顔は露見し、月の光に照らされている。月影のせいで光る彼の髪は、1本1本が柔らかい宝剣のようである。年は20を過ぎた頃であろう。その清婉な顔立ちはまさしく王子にふさわしい。

けれど王子の言葉を聴いた男は、慌てる。

「そんな！ 王子御身が自ら戦うなどと！」

「しかし、団長ひとりというわけにいかぬのも確かでしょう。王国の近衛騎士団は、団長ひとりを除いて全員……」

王子の続きをさえぎるように、男は激しく首を振る。

「なりません！ もし王子の身に万が一のことがあれば、国王陛下はもちろん、亡くなられた王妃様や、騎士団の部下たちにどんな顔を合わせればいいか……！ 王子、あなたの身は必ず私が守り抜いて見せます。ですからあなたは、ご自分が生き残ることだけをお考え下さい」

ですが、と王子は口を開こうとする。けれどそれは、

「だ〜いじょうぶツスよ、王子！」

明るい声に止められる。

団長と呼ばれた大男と同じ太い髪をザックリ切った12才の少年が、茶色のマントを肩からさげ、首に緋色の布を巻きつけた格好でいた。身長は、団長の腰にようやくと頭が届くくらい。

少年は王子に、にぱっと笑いかける。

「親父は王国一の騎士ツスよ？ 心配いりませんって！」

王子、団長、そして少年。

物語は、この広大な砂漠とこの3人を中心に、回ります。

第1幕 砂漠の王国（1）

大きな砂漠の真ん中に、丸く円を描くように広がるオアシス。

それを囲うようにそびえ建つ城と、そのまわりをもうひとつ円で囲った城下町。

それが砂漠の王国、ヘスペリデス王国です。

ヘスペリデス王国は、平和な国です。豊かなオアシスで腕の良い国王陛下が、私たちの生活を守って下さっております。

そして我らが王国の第一王子、そのお名をマーディルスⅡアルカスⅡヘスペリデス様とおっしゃいます。

マーディルス王子様は金髪紅目の清廉なお顔で、お優しく、仕草もやわらかく、けれど決して女性らしいわけではないのです。

すらりとお背は高く、落ち着いた物腰のそのお姿は、世の女性すべてが憧れる王子様であります。

金の糸のような長いその御髪を……。

オレはそこまで読んで、拾ったパンフレットをぐしゃぐしゃに丸めた。

どうせこれも、マーディルス王子という超がつくほどの高嶺の花に恋焦がれるどこぞの女性が、書いたものなんだろう。大概のパンフレットはこんなものだ。

オレは丸めたパンフレットを近くのゴミ箱に捨てると、大きなヘスペリデス城を見上げた。ヘスペリデスはそれなりに大きな王国だが、多少離れた街でも晴れた日にはこの城も見えるという。とはいってもオレは城のある城下町に生まれ育ったから、そんな離れた街に行ったことなんてないんだけど。

ったく世の女どもめ、マーディルス王子マーディルス王子とうるさいぜ。わざわざ隣の砂漠からやってくる女もいるっていうんだか

ら、その人気は確かに凄い。でもさ、男って顔だけか？ 城でぬくぬく育っただけの男に力があるか？ やっぱ男は、腕っ節だろ！？
って、若干12歳のオレが言うのも何だけど。
さて、と。オレは右肩にかけたシオルダーバッグを、左手でぽんと叩く。この中には親父に届ける弁当が入っている。母さんに頼まれて、届ける最中なのだ。まったく、忘れるなんて親父もマヌケだよ。

第1幕 砂漠の王国

ヘスペリデス城は王国としては珍しく、開かれた城だ。国民の声を直接聞こうという国王様のお考えらしい。兵隊は城内にいるし、城の見回りや門番もいたりするけど、出入りするのに止められたことはほとんどない。他国の王族や重役といった、お偉いお客様が来ているときくらいだろう。

オレはいつものように、堂々と正面から、正門へと駆け寄った。

「門番さん！」

城門には、いつものふたりが門番で立っていた。クールな人と、陽気な人。てんで反対な性格してるけど、1日ここに立っててケンカとかしないのかな？

少し話をして通してもらうと、兵の詰め所へ向かった。詰め所へ行くには裏庭を通り抜けるのが近道だ。オレは城の中へ通じるまっすぐの石畳をはずれ、メイドや兵が使う勝手口のある、城と城壁の間へと滑り込んだ。洗濯中のメイドや食事の用意をするコックたちに挨拶しながら、奥へと進んでいく。その先は裏庭になっていて、小さなオアシスがある。やしの木が1本だけ生え、うつすら草花の気配もある。このオアシスを通り過ぎて、さらに城をぐるっと回れば親父のいる兵の詰め所だ。

裏庭を通ると、やわらかい風がふわりと肌をなでた。砂漠の王国なのに、湿気を含んだ空気である。変だな、と違和感に顔を上げると、白い空が見えた。ああ、雨季が近づいているんだな。

その視界にふと、金色がちらついた。そちらへ焦点を合わせるとそこは2階のバルコニー。立っていたのは…マーデイルス王子だった。

ちらついた金色は、王子の髪だった。肩までかかる長い髪はうなじの辺りでひとつに結ってあって、少し勿体無い気がする。金の糸のような髪は太陽の光を反射し、砂漠の民の証ともいえる褐色の肌と、見事といえるまでのコントラストを見せていた。オレが見ても庶民とは質が違つと分かるきらびやかな服と、青の下地に金や銀の刺繍がなされ、大小さまざまな装飾品があてがわれている。肩から下がったマントも、かなり凝ったデザインがされていた。

オレ自身、王子を見たのは実は初めてだ。年は確か22ということだったけれど、滅多に人前へ出ては来ない。自身や国王様の誕生日、あとは新年くらいである。それも、全部に出席するわけではない。それでもすぐに、この人が噂のマーデイルス王子だと分かる。それほど、人目を惹きつけるのだ。

女たちが騒いでいるのを、何をこのミイハーたちはと想っていたが、改めなければならぬ。こんなキレイに整った男を、今まで一度も見ることがないのだから。

けれど何よりオレの目を留めたのは、彼の表情だった。大事に大

事に育てられ、温室…いやむしろ無菌室しか知らないであろう男の顔には、見えなかったのだ。

遠くを眺めるその瞳はうつろで、何も見ていないようだった。絶望に慣れてしまったような顔だった。その姿は儚げで、今にも霧に溶けて消えてしまいそうだ。

…と、こんなことを考えてつい凝視していたせいだろう。視線を感じたのか、王子がこちらを向いたのだ。

ぎく、と思わず身体をこわばらせる。けれど王子はふわりと。そう、ふわりと微笑んだのだ。

「こんにちは」

高すぎず、低すぎず。耳に心地の良い声だった。

オレは、慌てて辺りを見回した。裏庭にいるのは、オレひとり。間違いない。オレに声をかけているのだ。

「こ、こんにちは」

オレはかなり緊張して挨拶した。うわあ、本物の王子様だよ！

「ひとりですか？」

そう尋ねてくる彼の目は、もう虚ろじゃない。優しい王子様の顔だ。

「は、はい。親父…じゃない、父の忘れ物を届けに」

「お父上？」

「近衛騎士団団長の、イオ＝サテライトです」

「ああ、団長の息子さんですか。・・・」

呟き、そこで気づいたように、

「申し遅れましたね。私はマーデイルスという者です」

「あ、オレはルナータです。ルナータ＝サテライト」

「よろしく、ルナータ」

微笑んで、そこでふと王子は何か考えたようだ。ややつて、

「忘れ物を届けた後、予定はあるのですか？」

え。オレのこと？

オレは、首を振る。すると王子はまた、微笑んだ。

「それなら、私と少し話でもしませんか？」

思いがけない話に、オレは目を丸くして固まった。

「このような閉鎖された空間にいと、退屈なのです。国民の、子ども話を聞かせては貰えませんか」

むろんオレが、一も二もなく了承したのは、言うまでもない。

「おおー！ 助かったぜ息子よ！！」

弁当を届けると、太い黒髪をザックリ切った大柄なオヤジに抱きしめられた。ぐえっ、苦しい。

臙脂色のマントを肩に巻きつけるように下げ、白い騎士団の制服の胸には長である証のエンブレムが輝いている。そして腰には、両刃の剣が下げられている。これが親父だ。このヘスペリデス城で、近衛騎士団の団長を勤めている。

「よし、おまえ今日も剣見てやるぜ。闘技場に来い来い！」

職権乱用も甚だしいけれど、オレがおつかいを大人しく受けるのは、これが目的であつたりもする。いつもは喜ぶのだけど、今日ばかりは都合が悪い。

「悪い、今日は先約入ってんだ」

「何い、親父より大事な約束だと！？ さてはオメエこれだな！？」
「んなわけねえだろ、オレまだ12だぞ。」

小指を1本立てた自分の父親に、オレは呆れ顔を見せてやった。

「マーデイルス王子だよ」

言ったとたん。

詰め所の時が一瞬、止まった。

…え、何！？ オレ何か悪いことでも言った！？

「マ…、マーデイルス王子だとー！？」

と、親父の絶叫を境に、周りがどよめきだす。

「ルナータ！ おまえなんで…知り合いなのか！？」

「や…、さつき裏庭を抜けたとき、バルコニーに王子がいてさ。親父の忘れもの届けた後でいいから、ヒマなら話に付き合ってくれっ
て」

「バカ野郎！」

なぜか怒鳴られた。

「おれの忘れ物なんかどうでもいいんだよ！　そういう時はすぐにお相手してさしあげろ！　おまえ、それがどんな凄いことか分かってないな！？」

胸倉をつかまれ、親父にガクガク揺さぶられる。

「王族の方々はな、おれら騎士団ですらなかなかお近づきになれない方なんだ！　特に王子は公の場はもちろん、城の中でも滅多に人前に現れないし、それでもほとんど人と話そうとはなさらないんだぞ！！」

え、そ…そうなの？？

「団長——ッ！！」

ひとりの騎士が慌しく駆け込んできて、オレはやつと親父に解放された。彼に目を向けたのは親父だけではない、オレら親子の様子を見守っていた騎士団のみんなもだ。

彼の様子は、何かがあつたと明らかに物語っていた。詰め所の入口を壊れるんじゃないかって心配したくらい乱暴に開け放ち、全力で走ってきたようで息も荒い。

「どうした？」

親父はまっさきに、飛び込んできた彼に声を投げかける。表情は真面目だけれど、自分の息子はまだしつかりと破壊締めにしたままである。こら親父、マジメな話をするならまずオレをおろせ！

「北北西の方角より、超巨大な砂嵐が迫っています！　まっすぐ王国へむかってきていて…まず間違はなく直撃します！！」

そのセリフを裏付けるように、非常用の警鐘が鳴り響いた。

「ルナータ！ おまえは家へ帰れ！」

「でも、親父！」

「母さんとリアを守れ、兄だろう？」

「う…わ、分かった…！」

オレが走り出すと、街はもう半分パニックだった。オレの太くてかたい短髪も、服のすそも、激しくたなびいている。見上げると大きな渦となった砂の塊が、すぐ目前まで迫っていた。

速すぎる。

大きすぎる。

オレはもちろん、この王国に住むほとんどの人々は砂漠生まれの砂漠育ちだ。砂嵐だって、すでに何度も体験済みである。けれどこれは、その記憶にあるそののどれとも違った。速さも大きさも、尋常じゃない。

オレの中に、今まで感じたことのない恐怖がのし上がってきた。やばい。本能的に、感じたのだ。オレは、走った。

母さん！

リア！

親父！

みんな…！！

そのときオレは耳に優しい声を聞いた、…ような気がした。

——ルナータ！

視界の奥で、辺りが砂に巻かれていくのが見えた。きっとこの光景は一生、忘れることができないだろう。

そしてそこで、オレの意識はぶつつりと途絶えてしまった…。

砂漠の王国（２）

気がつくと、ゴツゴツした灰色の天井が見えた。ボロボロで、今にも崩れてしまいそう。ぼんやりと暗いのは、明かりの術を使っているせいだろうか。

・・・？

あれ？

オレは、がばつと身を起こした。あたりは石造りの、質素な部屋だった。ガラスすらはまっついていない窓の向こうには、上弦の月をバツクに、砂丘が見える。

「気がつきましたね、ルナータ」

穏やかな声に、オレはそちらへ目を向けた。

壁や天井と同じ灰色の石がいくつも積み重なり、成人ひとりが横たわれる程度に平たくなった部分が、狭い室内に１ヶ所だけあった。そこに座っていたのは、金髪紅目の超イケメン青年だ。

「うわ、マーデイルス王子！？」

え！？ 何で！？

うるたえるオレを見て、王子は、ふっ…と笑った。

「それだけ元気があれば、怪我の心配はなさそうですね」
言われて、うっと動きを止めた。何だか恥ずかしい。

王子は城で会ったときと違い、市民と変わらないアクリルと綿品質の服を着ていた。黒いタートルネックが、王子の髪色をよく映えさせている。アクセサリーの類もすべて外していて、随分と動きやすそうな格好になっている。

と、そのとき、自分の上に臙脂のマントがかけられていたことに気づいた。これは？

「あ、戻ってきたようですね」

外へ目を向けて、王子が言う。

誰が、と尋ねるまでもなく、大きな身体が中へ入ってきた。入り

口でバサバサ臙脂のマントをはたき、砂を払っている。

「王子、只今戻りました。…国の様子ですが、残ったのは…我ら3人だけのようです」

「そうですか…」

王子は腕を組んだ。口調こそ丁寧だが、ひとつひとつの仕草が若干、以前のような線の細さは感じないような気がする。

けれどオレはもはや、そんなのどうでも良かった。

「城は…とつ！ わ、ルナータ？」

飛びついたオレを受け止めて、親父は声を上げた。

「……うぐ」

「何だ？ 泣いてるのか？」

「泣いてねーよクソ親父！ 節穴な目してんじゃねーよ！！」

「うそつけ、鼻声じゃねえか」

「るせーバカ親父！！」

「たたくドラ息子が、言いながら。」

親父はオレの頭を、優しくなでてくれていた。

ヘスペリデス王国城下町は、先日の砂嵐で壊滅した。

城も街も砂に埋まった。人々も、暮らしも、昨日までは当たり前だった平和なオレたちの生活も、すべてはひとつの砂嵐でやられてしまったのだ。

ヘスペリデス城も、残ったのは王子と親父のふたりだけ。国王様も、騎士団も、大臣も、メイドたちも、皆…。

「父上も国民たちも、まだ死んではいませんよ。ルナータ」

そう言ったのは、————マーデイルス王子。

え？

「城も街も、砂の下に埋もれてしまっただけです。眠っているだけで、死んではいません」

妙に、自信ありげだ。

「なぜなら、——“鐘”が奪われていたからです」

オレたちのいる大きな大きな広い砂漠には、いくつも国がある。

しかし砂漠は。砂丘は。砂は。

動くんた。長い年月をかけ、少しずつ少しずつ。

そして砂は、王国を飲み込んでしまう。人々の住まう街とともに。それを防ぐのが、ヘスペリデス王国にある“砂漠の鐘”だ。

どんなつくりになっているのか、オレも、親父も…もしかしたら王子も知らないのかもしれない。

けれどその鐘を鳴らすと砂が波打ち、人々の街を飲み込まないようになるらしい。

その“砂漠の鐘”が、…奪われた？

「ルナータ」

名を呼ばれ、オレは王子を見る。

「団長」

親父も、背筋を伸ばした。

王子はオレら親子に、真剣な目を向けた。

「私はヘスペリデス王国の…“砂漠の鐘”の管理を任された国の王子として、鐘を取り返しに行くつもりです」

王子のその真剣な目は、力強さにあふれていた。普段のマーディルス王子とは、確実に違う。

「王子が行くとおっしゃるのなら、手前どもも一緒にいたします」
親父が言い、オレもうなずく。けれど王子は、首を振った。

「団長。あなたには、ルナータがいるでしょう」

親父の視線が、オレに向く。

「正直言つて、ルナータには危険すぎます。それに申し訳ないことに、鐘を探す理由は…王子としての立場とはまた別に、私の非常に個人的な理由もあります」

王子は静かに、目を伏せた。

「いわば、私のわがままです。そんなことに、あなたたち父子を巻き込みたくはない」

「しかし、王子…」

言いかけた親父を遮って。

オレは、すつくと立ち上がった。

「なあに言っんスカ、王子！」

腰に手を当て、仁王立ちまでしてみせる。

「危険があろうがなかろうが、王子だろうが市民だろうが、鐘を鳴らさないと国は戻らないんだろ？　ならンなもん関係なく、3人一緒に行くっきゃないスカ」

オレは、びしつと窓の外に浮かぶ上弦の月を指差した。

「覚悟しとけよ犯人！　ぜってー鐘を取り返してやらあ！！」

と、いうわけで。

ひとまず眠って、翌朝。オレたち父子とマーデイルス王子は、丸くなって座りそれぞれ腕を組んでいた。むろん、これからどうするか考えているのである。オレたちがいるのは、城下町のあった位置からそう離れていない、北の方角。

直接関係ないが、オレはあの後、親父にとっても怒られた。どうやらオレが敷布団代わりに使っていた臙脂のマントは、王子の持ち物だったらしい。王子がフロアに入ってくれはしたが。

「ともあれ、まずはルナータの服を何とかすべきでしょう」
王子に言われ、オレは自分の服を見る。

長袖の薄手のシャツに、ズボンのすそはひざ下までのロングブーツにしまっている。腰にはポーチをベルトに通した、いつもの格好のままだ。昼夜で気温差の激しい砂漠を動き回するには、あまりにそぐわない。

「といっても城下町は砂の下だし、他の街へ行くには距離がある。取りに帰ることも、店で買うこともできないし…。」

「ルナータ、こっちへ」

ベッド代わりに使っていた石畳の連なるところをこそそいじっていた王子が、手招きをする。オレが大人しく従うと。

ふわり。頭から何かをかぶせられる。すぐに頭は抜け、目の前に王子の整った顔が現れる。

「大丈夫そうですね」

オレの肩まわりをいじって形を整え、王子は言う。

見下ろすと、腰が隠れるくらいまでの茶色いマントがかけられていた。頭を通るタイプのものだ。その首まわりに王子は、今度は緋色の布を巻く、それをシルバーの金具でとめ、

「これをフード代わりにして下さい。マントのサイズは少し大きめですが、気にするほどではないでしょう」

「ほんとオレの頭に手を置いた。…意外とこの人、手が大きいんだな。これで大丈夫でしょう。私もマントと動きやすい服に着替えましたし、団長もマントを持っていますから」

「はあ…けれど王子、なぜ着替えやルナータに合うサイズのマントが、こんなところに？」

そう。オレもそれが聞きたかった。

「・・・」

王子は無言で、石造りのベッドに広げてあった臙脂のマントを広げる。

「…以前、ここを拠点にしていた者たちを知っているのです」
「ややつて、王子は口を開いた。」

「ルナータのマントは、そのうちのひとりが使っていたものです。彼女はわりと小柄だったので、ルナータでもサイズが合うのではと思ったのですよ」

ぴったりで助かりました、と王子は微笑む。

「…私は、近々城を出て調査に出る予定でした。その準備として、私の着替えはここに用意させておいたのですが…こんなかたちで役に立つとは思いませんでしたね」

「城を？　しかしそんな話は一度も…」

眉を顰める親父に、王子は苦笑いを見せる。

「申し訳ありませんね、団長。ご存じなくても当然です。…誰にも言わず、ひとりで出て行くつもりでしたから」

「王子!？」

しかし王子は親父を右手で制し、

「“砂漠の鐘”を奪った犯人に、心当たりがあるのです」

爆弾発言に親父はもちろん、オレも言葉を失った。

「けれどまさか、これほど大胆な行動に出るとは思っていなかったのですよ。誤算でした」

王子はマントを自分の肩にかけ、レモンイエローの止め具で固定した。

「…しかし王子、あなたに協力者がいるのは確かでしょう」

親父はまっすぐに、王子を問いただした。

協力者？

「誰にも言わず、とおっしゃいましたね。けれどあなたは『着替えを用意させて』ともおっしゃいました」

気づきましたか、と王子は微笑む。

「ええ、おりますよ。そして彼らは、必ずこの砂嵐から逃れて砂漠にいるでしょう」

「彼ら、ということは複数名ですか」

団長の言葉に、王子は頷く。

「私はまず、彼らと合流するつもりです。…ついていらっしゃるかどうかは、おふたりの自由で構いません」

オレは、親父を見上げた。親父は息を吐き、

「王子をお守りするのが私の務めです。どこまでだろうとお供いたしましょう」

わかりました、と王子は苦笑する。

王子はそのまま遺跡の入口に手をかけると、

「さあ、行きましょう」

マントをたなびかせ、砂の大地へとその身を投じた。

——オレたちの旅が、始まったのだ。

第2幕 砂漠の王子

—— マルス

声が、聞こえる。

—— マルス

俺を呼ぶのは、誰だ？

—— マルス

ああ…この声は…。

「あたしはここよ。 マルス」

俺の振り向いた先に、彼女はいた。

オレンジ色のバンダナをショートボブの頭に巻き、茶色いかぶりがマントが風もないのになびいている。ホットパンツに膝下までのブーツをはき、影のある笑顔をこちらに向けている。

5年前の、あの頃の姿のまま。

「…あなたは」

自分の声が掠れていることに気づいたが、震えないように抑えるのが精一杯でそちらの方まで気が回らない。

彼女はにつこりと、俺に微笑んで。

その姿が突然、朱に染まる。

気づくと俺の腕の中に、血まみれの彼女が倒れていた。

第2幕 砂漠の王子

・・・

…眠れない。

砂漠に放り出されて、二度目の夜である。今宵は下弦の月。まるで誰かがオレたちを見下ろして笑っているようで、オレは今日の空が好きになれなかった。初日と同じような遺跡は砂漠のあちこちにあり、オレたちは今日もそんな遺跡の中で夜が明けるのを待っていた。

日中に炎天下の砂漠を歩き回って体は疲れているはずなのに、慣れない旅の緊張や帰れない不安のせいか、どうしても寝付けない。ギンギンに目がさえてしまったオレは寝ることを諦めて、布団代わりのマントをひっぺがした。少し離れたところに、王子の後ろ頭が見える。眠ってるのかな？

覗きかけたオレは、ぎくりとした。

王子は、確かに眠っていた。けれどその様子が、尋常ではないのだ。眉間にしわを寄せ、歯を食いしばっているようだ。額は汗の玉がびっしり浮かんでいる。それでも声すらあげず、必死で耐えているようだ…。

「…っ、王子！」

オレは思わず、王子を揺さぶった。途端、王子は目を開ける。が、

「——マリ…！」

飛び起きて右手を伸ばし。

その先に何もないことに気づいて、王子はしばし、固まった。

そして詰まっていた息を一度に吐き出し、肩で荒く呼吸する。手を下ろし、歯を食いしばる。

「・・・」

固まったままのオレに気づき、王子は荒い呼吸のまま、弱々しく微笑んだ。

「…すみません、ルナータ。驚かせてしまったようですね」

オレは、あわてて首を振る。けれど、声は出なかった。

王子は大きく息を吐き、マントをどけて石造りの硬いベッドに腰掛けるかたちになった。

「起こしてしまったようですね」

また、オレは首を振る。

「眠れなくて…外で見張りしてる親父のところに、行こうと思ってたんだけど…」

やっと、声が出た。

「そうですか…」

ふ、と王子は遠い目をする。

遺跡の窓から差し込む月の光に照らされたその顔は、まるで絵画のようだった。

「…少し、話でもしましょうか。ルナータ」

「では驚かせてしまったお詫びに、私の秘密でも」

そう言って王子は、オレの前に右手のひらを上に向け、見せた。
なに？

「炎よ」

王子の言葉に応え、手のひらにボツと炎が生み出された。

「！？」

オレはまん丸に目を見開いて、炎を見つめる。次に、王子の顔を見た。王子の表情は、いたずらが成功した子供のようだ。

「実は、炎魔導士なのですよ」

そう言つて炎を握りつぶすと今度は、パン！ と両手を合わせる。

それをゆっくり広げると、光の玉が…

「わわわわわっ、か、火炎球！？」

「残念でした」

王子はそれを、ぽいと宙に放る。爆音を立てて炸裂するはずのそれはぴたりと空中で静止し、淡い光を煌々と放っている。

「ただの“明かり”の術さ」

そして王子はウィンクひとつ。

…この人は、なかなかオチャメらしい。知らなかった！。

魔導というのは、人間の外の力を、呪文という道具を使って呼び出す技術のことだ。けれど“明かり”のような誰でも使える魔導はともかく、ふつうの魔導には相性というものがある。

水と相性の良い人間が水の術を使うと、小さな力で膨大な水を操れる。場合によっては、そばにある水を呪文なしの掛け声だけで使ってしまう人間もいるらしい。しかし水と相性の悪い人間が水の術を使おうとしても、大きな力で少しの水しか操れない。相性の程度にもよるが、まったく呼び出せすらない人間もいるそうだ。

そんな、水と相性の良い魔導士を「水魔導士」と、光と相性の良い魔導士を「光魔導士」と、それぞれ呼ぶ。だから王子のいう「炎魔導士」というのはつまり、炎の術を得意とする魔導士であると言っているのだ。

けれどこの「炎」というのは魔導の中でも別格だ。炎を呼び出すことも、そばにある小さな火を少しだけ操ることも、並大抵の魔導士には無理であるといわれている。それだけ炎というのは扱いづらく、威力が大きく、格の違うものなのだ。それはこの世界の成り立ちである伝説と関係があるのだが…まあ、そっちはそのうち改めて語ろう。

しかしその「炎」を自在に操れるのが、まさかこのマーデイルス王子だったなんて。

「何で魔導なんて覚えたんだ？ お城で必要だとも思えないのに」「明かり」をつんつんつについてみながら問うと、王子は「うーん」とあさつての方を向き、

「…暇でしたから」
「どんだけツスカ。」

「後は必要に応じて、ですね」

「え？ 城でも必要なことってあるんスか？」
オレは首をかしげる。だって城じゃ、お抱えの魔導士くらいいるんじゃないの？

すると王子は、ふ…と微笑んだ。あの、謎に満ちた笑いだ。
「ルナータ。ここからは、ヒミツのことですよ」

右手の人差し指を立て、王子は笑う。そしてもう片方の手で手招きしたので、オレはそれに従った。王子の隣に腰掛けると、王子は“明かり”を消した。

「マルス」

唐突に。王子は、それだけ言った。

…は？

「それが私の、王子ではないもうひとつの名前です」
王子じゃない？

オレには、よく分からない。

「私が17の頃の話です。もともと趣味で魔導の研究はこつそりしていました」

城の者たちには内緒でしたけれど、と王子はくっくと笑う。

へえ、この人もこういう、いたずらっこみたいな笑い方するんだ。オレが街で見る連中と比べれば当然、お上品な笑い方ではあるけれど、王子様らしい微笑みって感じの笑顔しか見たことなかったから、なんだか新鮮だ。

けれどそんなことを考えていたオレの余裕は、次の爆弾発言で吹

っ 飛ぶことになる。

「そして飛行の術を覚えた私は、夜な夜な城を抜け出すようになったのですよ」

おいおいおい！ 王子として大問題だよ！！

「その時、私には幾人かの友ができました。マルスというのは、彼らがくれた名なのです」

そう笑う王子は、珍しく嬉しそうだ。

「とても気のいい連中です。荒いけれど、私の知らぬことを多く知っていました。時々ケンカもしましたけれどね。…初めて魔導を実践で使ったのは、それでしたね」

危ない！ 危ないよ王子！！

「でしょうね。私もそう思います」

思うならやめとけ。

「そう、その友たちなのですが…」
言いかけて。

急に、王子の表情が険しくなった。

「お、王子？」

「下がっていなさい、ルナータ」

王子はマントを羽織り、外に出る。親父が見張りをしているはずじやあ…

「いけません、お下がってください王子！」

親父のどら声が飛んできた。

な、なに？

親父の言葉に従わない王子の後ろから、オレはこっそりと外を見る。カステラのような満月の光に照らされて、黒い影がいくつもうごめいていた。

影は、異形だった。光のない異常に大きな丸い瞳と、耳元までさけた赤い口からは鋭いキバが見え、骨格はあらぬほど関節が飛び出して見える。

また一方は、クマの胴体に、それぞれ異なる角の生えた頭が3つ

つき、妙に長い腕をたれ下げていた。

そんな異形の影が、オレたちのいる遺跡を取り囲んでいた。

「ヒッ」

オレは思わず、王子のマントにしがみついた。

親父が剣を抜き、走る。けれど、

「駄目です、団長！ 奴らに剣は効きません！！」

王子が叫んだ。

それを証明するかのように、親父の剣がはじかれる。硬い音がするわけでもないのに。

「親父！」

叫んだオレだが、ぶつぶつと。王子が口の中で何か言っているのを聞き、オレは顔を上げた。すると王子が、目で何か合図する。なぜかこの時オレは、王子がどうして欲しいのかが分かった。

「親父ッ！！」

オレはもう一度、叫んだ。あせり顔の親父が、ちらりと視線をこちらに向けた。

同時にオレは、王子から離れる。

「黒コゲになりたくなかったら、奴らから離れろ！」

親父が、後ろへ大きく跳ぶ。王子が、パン！ と両手を合わせた。

その合わせた両手をゆっくり広げると、手と手の間に、赤い球が現れた。それは手を広げるスピードにあわせて大きくなり、

「火球！！」

王子が異形の一体に向けて、球を放った。

今度はさっきの“明かり”の術と違い、本物の火炎球である。

ゴウン！！ と爆音を轟かせ、火炎が炸裂した。炎は2、3体の

異形を巻き込んだ。

「隠れていなさい、ルナータ！」

王子が、親父のもとへ走り出す。オレは言われたとおり、崩れた遺跡の影に入り込んだ。

「ダーク・ブレイク！」

親父の元へ着くなり、王子は親父の剣に術をかけた。キン！という澄んだ音と、刃が赤く光りだす。

「これで奴らにも剣が効きます。ただし使うほど込めた魔力が減りますから、赤い光が弱くなってきたらすぐに言っておしまい、術をかけ直します」

「は、はあ、ありがとうございます。…しかし王子、あなたはなぜこのような術を？ それに炎の術とは…まさか王子は、この異形たちをご存知で？」

「こいつらの総称は『キメラ』です。詳しい話は、こいつらを倒した後でしましょうか」

言って王子は、炎の矢でまた一体、“キメラ”を倒して見せた。

王子は、強かった。炎の術だけでなくオレの分からない魔導も使いこなし、“キメラ”たちの攻撃をかわしながら、時に確実に、時に派手に、それでもかなりのペースで、“キメラ”たちの数を減らしていた。

親父も慣れない化け物相手に、“キメラ”たちを倒していく。時たま気づいた王子が親父の剣に術をかけ直し、ふたりはあつという

間に“キメラ”軍団を全滅させたのだ。

「あれは『キメラ』という、人工的に造られた生物です」

“キメラ”軍団を壊滅させた後、遺跡でまたしても円になったオレたち3人は。王子の話に、オレと親父は耳を傾けていた。

「数々の魔導を駆使した上で生まれた技術であり、当然、それは非合法です。なぜそんな生物が造られたのかという点はこのさい置いておきます。しかし、問題は」

王子は形の良い眉をしかめ、あごに右手を当てた。

「人工魔獣である“キメラ”を、私たちへ仕向けた連中がいるということ。おそらく、造った奴らでしょう。ということは“砂漠の鐘”を盗んだのも連中か、もしくは盗んだ側と手を組んでいるかのどちらかになります」

「王子」

オレは授業ですらやったことのないほど高く手をあげる。

「はい、ルナータ」

「何で王子は、そんなに詳しく知ってるんスか？」

「さきほど言ったことを、覚えていますか？ ルナータ。私に市井の友がいるという話を」

オレはうなずく。親父は初耳だから驚いているようだが、王子の話の腰を折るようなことはなかった。

王子は目を伏せ、告げた。

「昨日話した私の協力者というのは、その市井の友です。彼らとともに、私は……“キメラ”の製作者たちと、戦ったことがあるのです」王子の爆弾発言に、オレと親父は言葉を失った。

「…そうか。何となく、オレは察した。だから王子は、“キメラ”を知っていたんだ。剣が効かないことも、魔導が通じることも、魔力を剣に込める「ダーク・ブレイク」という術が有効なことも。「馬鹿な！」

けれど親父は、立ち上がった。

「王子が外出なさる時は必ず護衛がつき、移動もすべて馬車でした！ 城にいらつしやる時も、王子が外へ行かれたらすぐ気づかぬはずがないではありませんか！！」

「私が寝室へ入ってから、ずっと見ている者はいないでしょう」さらりと。王子は、言い放った。

「本当は言うつもりなどありませんでしたが、疑問を抱えたままでは剣の筋も鈍りましょう。団長、認めたくないかもしれませんが、私の話すことはすべて事実です」

「しかし、王子…」

「イオ＝サテライト！」

王子にフルネームで呼ばれ、城仕えの長い親父は黙り、ピツと背筋を伸ばした。

「ならば聞きます。先ほどキメラと戦った私を、どう思いましたか？」

「…」

少しだけ、親父はためらって。

「…とても、戦いに慣れた者の動きであると思いました」

「ならば、そういうことなのでしょう」

王子は腕を組む。しかし親父が棒立ちしたままのことに気づき、

「団長。気張らずにいきましょう」

にこりと微笑んで、親父に席を勧めた。

「私に秘密があったことは謝ります。けれど、私たちの『砂漠の鐘』を取り戻して王国を復活させる』という目的ひとつは変わらないでしょう」

親父と王子の張り詰めた空気がやっとゆるみ、オレはいつの間にか入っていた全身の力を抜いた。

「王子は、落ち着いてるッスね」

しかしオレがそう呟くと王子は、

「そう、見えますか」

悲しそうに、微笑んだ。

夢く見ると、勇ましく。

強いと見ると、小さく見える。

誰にも知られず炎魔導士となり、組織と戦っていたという。

マーデイルス「アルカス」ヘスペリデス王子って…いたい、何者なんだろう。

第3幕 沃地の魔獣

「ルナータ、そこは砂が深いから足をとられるなよ」
「うん」

親父の助言を気にしつつ、オレは親父と王子の背を必死で追った。体力差はもちろん、歩幅もまったく違うのだ。頑張らないと、おいでいかれる。

砂漠生まれの砂漠育ちだから、砂には慣れっこだ。…と、余裕があったのも、初めの2日間だけだった。体温をはるかに上回る気温と直射日光の照りつける昼間、氷点下にまで下がる夜間。その気温差も、知ったつもりでしかなかった。

歩いているつもりなのに、ちつとも前に進まない。気づけば王子と親父はずっと前にいる。キメラに襲われても、戦うすべを持たないオレは隠れてみているだけ。…そんな自分に、腹が立つ。

第3幕 沃地の魔獣

「少し休憩しましょう、団長」

そう告げる王子に頷き、親父は手早く日よけを立てる。その間に王子は水筒から水を1杯くみ、

「ルナータ、飲みなさい」

オレを座らせそれを差し出した。大人しくカップを受け取り、オレはがつくりうなだれた。

「王子、少しあたりの様子を見てきます」

「お願いします。あ、オアシスが見えたら教えて下さい」

「かしこまりました」

王子と親父がそんな話をしている間も、息が切れてオレはずっと黙っていた。

ふたりはまだまだ、余裕なんだ。明らかにオレが足を引つ張つてゐる。はあ……とため息をつきかけたオレは、不意に伸びてきた手に思わずそれを止めた。

ひた、と当てられたのは王子の右手だった。え？　え？　なに？？

「ちよつと熱いな……」

眩き手を離すと、王子は口の中で小さく呪文を唱え、

「風よ」

日よけの中に、空気の流れができた。

「少しはマシになりましたか？」

「……」

こくん、と頷く。ぬるいけど、風が少しあるだけでこんなに違うなんて知らなかった。

「熱中症には気をつけねばなりませんよ。特に、ルナータの体はまだ小さい」

王子は空になったオレのカップを左手で受け取り、もう1杯水をそそいだ。それをまたオレに飲ませてくれた。

「おーじい」

フードの中に積もった砂を払っていた王子は、オレの呼びかけに振り向いた。

「どうしました？」

「何で王子は、そんなに強くなつたんですか？」

たずねると、王子は目をぱちくりさせた。

王子は、強い。炎を中心に大地や風、浄化の魔導でキメラと戦い、

バツバツとキメラの集団をなぎ倒している。とても、一国の王子にできる芸当とは思えない。

しかし王子は、自嘲気味に笑った。

「ルナータが思っているほど、私は強い人間ではありませんよ」

「だって、キメラとかいっぱい倒してるじゃん」

すると王子は困ったように微笑んで、外していたマントをまた肩に下げた。

「私はたまたま、人より魔力が多いだけです。…人どころか自分さえひとりでは守れない、弱い人間ですよ…」

そう呟く王子の目は、見たことあるものだった。

初めて会ったあの時…砂嵐が来る直前、城のバルコニーで遠くを見つめていたのと同じ目だ。少しうつろで、現実ではない何かを見て、諦めにも似た憂いを含んだあの顔だ。

「王子…？」

不安になって呼びかけると、はっと我に返ったように王子はオレを見つめ、

「…ルナータだって、これからどんどん強くなりますよ。自分の力を信じなさい」

オレの頭に手を乗せた。

今の話、もしかして王子にとっては触れて欲しくない話題なのかもしれない。何か言おうと口を開いたのだが、「オアシスが見えた」と親父が戻ってきて、オレは何も言えないままだった。

「こちらの方角でしたが…」

「方位的にもあっていますし、塵気楼ということはなさそうですね」
ザクザク砂丘を歩きながら、親父と王子は会話する。オレは、すぐ前の臓脂のマントを見上げてみた。時折フードの隙間から、金色の髪が太陽の光を反射しているのが見える。

「王子：オアシスにいる仲間とは？」

何だかんだで結局、協力者：王子の言う「仲間」がどんな人達なのか、何人いるのか、聞けていないままだった。ヘスペリデスの城下町から見て北に位置しているオアシスで合流する約束になっているという話だけだ。

王子はなにも告げていないことに謝罪してから、親父の問いに答えた。

「ミラという名の女性です。白魔導にとっても長けた者ですから、合流できれば非常に心強いですよ」

「女性！？ 女嫌いで超有名な王子がですか！？」

「…彼女は特別です」

素っ頓狂な声を上げた親父に答える王子の表情が、オレにはちらりと見えた。

照れくさそうなわけでも、恥ずかしそうなわけでも、嬉しそうなわけでもない。かといって面倒くさそうなわけでも、真顔でもない。なんとも不思議な顔をしていて、それを言葉で表現するには、オレに語彙力がなさすぎる。

王子の女嫌いは、市民の間でも有名くらいだから、よっぽどなんだろ。聞けば、社交界ではいつの間にかダンスになると姿を消し、近寄る貴族の令嬢や他国の王女からは、巧みな身のこなしでさりげなく距離をとっているそう。ま、キメラとの戦いぶりを見れば、あながち誇張でもないのだろう。そんな王子に親しい女性がいるなんて、そりゃあ親父もびつくりだ。

「そもそも彼女は私を男として見たことないでしょうし、正直なところ私も彼女を女扱いしたことありませんからね」

「どんな人なの？」

尋ねると、王子はオレを見下ろして、話してくれた。

「先ほども申した通り、白魔導にとっても長けた者です。防御・浄化・回復において、彼女の右に出る者はそうそういないでしょうね。実を言つと私が夜に抜け出していることが露呈しなかったのも、彼女

が傷を癒してくれたおかげです」

彼女がいなかったらとっくに見つかっていましたね、と王子は苦笑する。

白魔導は、魔導の中では他の地水火風とは違う位置におかれるものだ。呪文を媒体に魔力で引き出すとか、相性があるとか、そういった点では同じなのだが、攻撃や生活の利便性に関わるものではない。王子も述べたが、防御や浄化、結界、回復…主に神官や医者を使う魔導とされている。

「私のような人間でも遠慮なく物を言ってくれる、数少ない存在です。芯の通った強い女性ですよ。もっとも…一番、怒らせたくない相手でもあります…」

何かを思い出したのか、王子の表情が珍しく曇った。オレは慌てて話題をそらそうと、

「そ、それじゃあ、他の仲間は何？」

「ああ、彼はトゥバンといって――…」

言いかけた王子に、オレは襟首を掴まれて、ぐいっと引き寄せられる。

「な、何？」

「ルナータ、団長。オアシスまで走って下さい」
は？

王子の真意は、オレや親父が口を開くより先にすぐわかった。

「早く!!」

王子が叫ぶと同時に、砂に身を隠していたカメラたちが、いつせいに姿を現したんだ。

今までのキメラたちは皆、一体一体が違った姿をしていた。けれどここで現れたキメラはどれも同じ姿をしていて、妙に統率がとれていた。みんな、針金のように体が細く、かろうじて五体満足を保っているように見えた。今まで見てきたキメラの中では一番、人型に近い。だけど、関節はおかしな方向に曲がり、立っているのもやつとといった感じにふらふらしている。

「お下がりください、王子！　ここは私が！！」
親父は剣を抜き、走る。

「駄目だ、団長！」

王子の制止を聞かず、親父はキメラにむかっていく。

王子は懷に左手を入れ、引き出すとそこには一振りのナイフ。王子はそれをためらいなく、親父の方へ投げ……ってちよつと！？

「ブレスト・アロー（風の矢）！」

叫んだ王子の声に応え、速い一筋の風がオレと王子の後ろから通り抜け、飛ぶナイフの背を押した。しかし親父の一步手前で失速し、さくりと砂に刺さった。

届かなかった……？

そう思ったのだが、これも王子の思惑通りだったのだ。

「くっ！？」

突然、親父の動きが止まった。

「ルナータ、オアシスへ！」

名を呼ばれ、はっと我に返ったが隣にはもう、王子の姿はない。

王子はまっすぐ親父の方へ走っていた。親父はというと、どうしても動けないらしい。走る体勢のまま、固まっている。王子は動けない親父に迫っていたキメラを、炎の術でけん制する。親父を自分の背でかばうように立つと、

「眠れ！」

呪文を放つ。親父の後ろに群れていたキメラたちが一瞬、動きを止めて…

それだけだった。

「やっぱりか…」

王子の弦きが聞こえる。どうやら、何かを試したようだ。

王子はすぐに別の呪文を唱え、放つ。

「炎の雨よ！」

言葉に応え、キメラたちに炎の雨が降り注ぐ。王子は、借りますよ、と断って親父の剣を拾うと、

「…うらむなよ！」

キメラたちへ叫んだ。

…「うらむな」？

ダイク・ブレイク
「魔力剣！」

剣が怪しく光り、キメラを真つ二つにする。その太刀筋をすぐ横に薙ぎ、

「弾ける！」

剣に込められた魔力がはじけ、水平にぶっ飛んだ。その光は3匹のキメラを同時に上下ふたつに分けた。

つ…、強え。

今まで魔導で戦う王子しか見てなかったけど、剣の扱いも相当だ。オレは親父の職業柄、剣術に関しての目だけは肥えている。それでも王子が、城の騎士団たちと引けをとらないくらいの腕を持っていることが分かるんだ。

その王子が、ハッとオレを振り返った。え、何？

「ルナータ、逃げろ！」

オレに、影がかかる。後ろにはいつの間にかカメラが一体、そこにいた。

親父は、動けない。王子は、間に合わない。

そしてオレは、…自分を守るすべすらない。

「魔よ、あるべき姿に戻れ！」

ぎゅっと目を閉じたオレの耳に、凜とした女の声が響いた。

目を開けるとそこにはもうキメラの姿はなく、足元に水を吸った砂の塊があるだけ。見ると、あれだけいたキメラの数も半分以上に減っている。

「こつちよ、早く！」

さっきの声がまた届き、その声で王子は親父のそばの砂に刺さっていたナイフを引き抜き、その腕をつかんでこちらへ走ってきた。急に動けるようになった親父は驚いているが、今は逃げるのが先決だ。

「ルナータ、走れ！」

かたまっているオレを抱え上げ、王子は走る。すぐ後ろまで迫っているキメラもいたが、

「聖なる光よ、散れ！」

女の声に応えた弾けた光によって、消された。

すぐ目前まで来ていたオアシスは、淡い光に包まれていた。ぼんやり光っていて、もやがかかっているようにも見える。

「こつちよ、こつち！」

また聞こえた声に、王子はブレーキをかけ左に方向転換する。親父も何とかそのフットワークについてきている。

光のもやの一部が、ある一ヶ所だけかかっていなかった。王子は親父を促し、その中へ駆け込んだ。

オレたち3人がそこをくぐると、入り口はまた光のもやで覆われてしまった。抱えられていたオレはともかく、全力疾走した親父の息は完全にあがっている。しかし年の違いか、王子はオレをおろすと辺りを見回し、すぐに立ち上がる。言葉も出ない親父とは体力に差があるようだ。

「ありがとう、ミラ。助かった」

息を切らし、王子は奥にいる人影へ苦笑する。

「まったくもう、世話の焼ける連中ばかりなんだから」

そこに立っていたのは、女性だった。

すみれ色のストレートヘアはバレッタでまとめられているが、後れ毛が胸のあたりまでたれている。首にはクロスが下がっていて、服装はよく医者が着ている真っ白なローブの上に、クリーム色のマントをかぶったものだった。年は王子より少し上くらいに見える。切れ長の目が似合う大人の女ってかんじだ。

王子は彼女を「ミラ」と呼んだ。この人が、王子が言っていた仲間のひとり？

「な……！」

けれどそんな中、まだ息の荒い親父が、声を上げた。

「ドクター・ウェイル！ なぜ！？」

え！ 知り合い！？

「城で…王族の主治医、ウェイル夫妻の娘さんだ。ご自身も医者で、両親の助手としても城へ出入りされていたが…」

親父が言う。お、お医者さん？

「近衛騎士団長のサテライトさんですよ。こんなところでお会いするなんて思いませんでしたけど。それと…」

ドクター・ウェイルはこちらへ向く。

「この子は？」

「ルナータ」サテライト、団長の息子だよ」

答えたのは王子だった。そう、とドクターは微笑み、オレの顔を覗き込んできた。うつ、近い…。

「はじめまして、ルナータくん。わたしはミラ」ウェイル。察したと思うけど、マルスの仲間よ。表の顔としては女医だけだね」マルス。

この人は今、王子のことをそう呼んだ。それは王子が、市井にいる仲間たちがつけてくれた自分の呼称だと、嬉しそうに語っていたものだ。だから、オレはすぐに納得したよ。

このドクター・ミラ」ウェイルという人は間違いなく、王子の仲間だと。

「それでミラ、トウバンは？」

王子の声にドクターは、オレに合わせてかがんでいた背を伸ばす。

「まだ来てないわ。どこまで行っちゃったのか…最悪、国の様子にまだ気づいてないかもしれないわね」

なにやらよく分からない会話を続け、まあとりあえず暫くここで待機ね、と結論付けたドクターと王子に、オレはあわてて声を上げる。

「で、でもさ。大丈夫なのか？ オアシスって目立つんじゃない？」

オレが言いかけると、ドクターはひらひらと右手を振る。

「大丈夫よ、オアシス全体に結界を張っておいたから。キメラは入ってこられないわ」

さらっと簡単に言うけど、境界って…オレは辺りを見回した。

広さはだいたい、城下町の1ブロックくらいはあるんじゃないかな。この光のめやが境界だろうけど、境界っていうのは相当高度な白魔術のはずだ。それをこんな広範囲にかけるなんて。

王子が、白魔道で右に出る者はそうそういないって評価していたけど…合点がいったというか、予想以上というか。

「彼女ならこのくらい、お手の物でしょう」

対する王子も、あっさりしている。な、何て人たちだ。

「それよりマルス、ほらこれ」

ドクターはマントの内側、腰にぶら下げていた長い剣をベルトごと外すと、ぽいとそれを王子に放った。王子はあわててそれをキャッチすると、

「こらミラ、もっと大事に扱ってくれよ！俺の相棒だぞっ」

「やかましいわね、ちゃんと手入れまでしてやっただから感謝なさい」

「どうせ手入れしてくれたの、おまえじゃないだろ…」

ごん、と鈍い音が王子の頭に直撃する。

ドクター！一国の王子様にゲンコはないって！！

「いいのよ、このバカにはこれくらいで」

さらにバカ呼ばわり！？

そこでドクターは、ふう、とひとつ息を吐き、

「とにかく、キメラ程度だったらこの結果には入ってこれませんから。安心して休んで下さいね…団長、ルナータくん、聞いてます？」

何だかいろいろ驚くことが多すぎて、オレと親父には、ばかんとする以外の選択肢はなかった。

オレの知る…というより世間が知っている王子は、ルックス完璧、仕事も早くて確実、身のこなしや口調も丁寧、それゆえファンも多い。逆に反感を買うこともあるが、あまりに欠点がなくつけない女嫌いだということくらいだろう。そんな、向かうところ敵なしという「王子の鑑」だ。

だけどドクターが現れた瞬間、それが仮面だったと気づかされる。口調も市井の男と変わらないし、一人称までがらっと変わった。物腰も繊細さが身を潜め、「王子様」という表現が吹っ飛んでしまいそつになるほどだ。

「…フリーズしてるわね。マルス、いつもの猫かぶりしてたの？」

「営業スマイルと言ってくれ」

「あんたのそれは営業じゃなくてもはや詐欺よ」

ドクター、言いえて妙。

「あのね、団長、ルナータくん」

苦笑いを見せるドクターに、オレと親父は呆然としたまま視線を向けた。

「こいつ、猫つかぶりなの。普段は王子様らしく振舞ってるけど、素の時はけっこう粗野なところがあるから、気をつけてね」

「粗野って…」

王子に一番似合わない言葉が、まさか出てくるとは。どうしよう、オレ、受け入れるのに時間がかかるかも。

「だからさつさと猫かぶるのやめたらって、言ってるのにねえ」

「突然できるわけないだろ、団長やルナータとは城でも会ってるんだから」

「あら、じゃあオアシスに入った途端、仮面を捨てたのはなぜかしら？」

「団長たちに素を知られるより、ミラに営業スマイル見られるほうが数倍ヤダ」

「残念ねえ、久しぶりにマルスの王子様が見られると思ったのに」王子とドクターの掛け合いを見ながら、オレは少しずつ、落ち着きを取り戻していた。

ドクターに会ってから、王子の口数は一気に増えた。気を許しているのは明らかだ。…こうしてみると、王子も普通の人なんだな。何だか少し、王子との距離が縮まった気がして、嬉しかった。

「…うん、さすが。剣の調子は良さそうだな」

ふとその声で我に返ると、王子は鞘から剣を抜き、刃の部分を確認していた。それをまた鞘に戻すと、自分の腰のベルトに鞘ごと剣を差し込んだ。

「まったくもう、人には大事にしろって言うくせに自分は乱暴なんだから。前ほどでなくても今回だって、刃こぼれがひどいってばやかれたのよ」

「へーへー」

剣を左の腰にセットしながら、王子は面倒くさそうに答えた。お母さんに叱られる思春期の息子みたいだ。とても口には出せないけど。……それで、マルス。さっきのキメラたちんだけど」

ずっと軽口を叩いていたドクターの声から明るさが抜け、ふたりの雰囲気之急に重くなる。王子はちらりとドクターを振り向く。それだけで、ドクターには伝わったらしい。深いため息をつく。

「効かなかったのね。『眠り』の術。やっぱりあいつらが関わってるのね」

「そ……、そうです、王子！」

キメラの話題で我に返った親父が、王子に詰め寄った。

「なぜあそこで、私を止めたのですか！」

親父が言っているのはさっき、キメラに襲われたとき。王子が変な術で親父を動けなくさせたことだ。

「何度も申し上げておりますが、王子をお守りするのは私の役目です！」

「団長。……あのキメラの正体を、知っていますか？」

異常なくらい落ち着いた、王子の声に。親父も思わず、勢いを引いた。

「正体……ですか？」

「知らぬ方がいいのです。あれを倒してしまっただらきつと、あとで罪の意識に苛まれることになりますから」

……？

王子の言っている意味が分からず、俺と親父は顔を見合わせる。

それからドクターを見るが、知っているであろう彼女は肩をすくめるだけで語らなかった。

第4幕 何彼の決落

マルス。おまえは真面目すぎるんだ。

真面目すぎるから、許せないことも多いだろうけど。

これが、現実なんだよ。

同じヘスペリデス王国なのに、城と街とその外とじゃ大違いなんだ。

おれには、こうするしかなかった。

こうでもしないと、大事なものを何一つ守れないんだ。おれは、無力だから。

だから、マルス。

おまえは、強く生きてくれ。

おまえはきつと、おれより強い。おれよりあいつを、幸せにしていられる。

頼むよ、マルス。

おれの分まで、あいつを……マリアナを——…

第4幕 何彼の欠落

「デネボラが！？ あいつが来たのか！！」

テントの中で眠っていたオレは、王子の叫びに近い声で目を覚ました。隣では親父が、大いびきをかいて眠っている。テントの入り口からさし込んでくる淡い光は、外で“明かり”の術が放っているものだろうか。

「しっ、静かに！ 団長とルナータくんが起きるでしょ」

少しの間。オレがあわてて寝たふりをする、王子とドクターが中を覗いてきたのか、つむったまぶたを通して一時だけ明るくなり、また闇に戻った。

「…とにかく、トウバンが合流するまで待ちましょう。あいつの言うとおりに動いても…」

「ミラ！」

「落ち着きなさいよ、マルス。…仲間の仇を討ちたいのは、あなただけじゃないわ。わたしだって、トウバンだって同じなの」

「・・・」

王子は、何も言わない。

オレからは、王子とドクターの声しか聞こえない。だから表情もしぐさも、何一つ見ることはできない。

「けど、「仲間の仇」って…？」

「…分かった。でも時間が経っても、不利になるのは俺たちだよ」

「ええ。だからこうしましょう。あと2日、トウバンの帰りを待つ。そして彼が来てもこなくても、2日経ったら【黒のオアシス】へ侵攻する」

ああ、と王子の頷く声。続くように、ドクターのため息が聞こえた。「まったく、あなたって本当に頑固よね。そんなにあの父子が気に入ったの？」

「…まあ、そんなトコ」

「なあにが『そんなトコ』よ。あのマントまでルナータくんにあげちゃったくせしてさ。あーあ」

「何だよ、その言い草は」

「あなたこそ、格好つきたいならよそでやりなさいよ。わたしの前でしたって何にも思わないわよ」

「・・・」

またしても、王子は黙った。どうやらドクターの方が、王子より立場が強いのか口が強いのか…たぶん、両方だろう。何となくだけど。

「じゃ、どちらにしろ明後日の夜明け。父子が寝ている間に、【黒のオアシス】へ攻め入るわよ」

… なっ！

オレは危うく叫びそうだった自分の口を、慌ててふさいだ。

まさか… いやでも、今のふたりの会話を聞く限り間違いない。王子とドクターは、オレと親父を置いて敵の陣地へ乗り込むつもりだ。それも、たったふたりで。

王子は砂嵐のあった日の夜に、「犯人に心当たりがある」と言っていた。しかしそれ以後、心当たりは誰なのか、個人なのか組織なのか、どこにいるのかどんな連中なのか、何を聞いても答えてはくれなかった。「まだ確証がない」と言い張るだけで、教える気がないんじゃないかと思う時もあった。

しかもオレたちに内緒にして、ドクターも犯人のことを知っているようだ。知っててオレたちに教えていないし、教えようとしらない。なんか、すっげ腹立つんですけど。

「ミラ」

「なによ」

「…ごめん」

王子の、不意に放った謝罪の弁。思わずオレは毒気を抜かれた。

ドクターは、口を閉ざした。けれどため息をついて、オレたちに自己紹介したときより優しい口調で。

「わかってる」

と、一言だけ告げていた。

… ふうむ。

「けっきょくトウバンのやつ、間に合わなかったな」

「変なトラブルが起こってないならいいけど…今、あいつはひとりだものね」

「…まあ、何かあったとしてもトウバンは生き延びるさ」

「そうね、マルスと違うし」

「どういう意味だよ、ミラ…」

男と女の声が聞こえる。新月に近い下弦の月のせいでいつも以上に暗い夜だ。砂が移動する音が聞き取れるくらい、静かである。

声がだんだん近づき、おそらく足元を照らすために使っている魔道のものである光と、ふたつの人影が岩場にうつる。その影が岩の角を曲がった途端、

「うわっ!？」

ふたりは驚いて歩みを止めた。

「ルナータ! 団長!」

「ど、どうして」

仁王立ちするオレら父子の姿を見て、王子とドクターはばつの悪そうな顔をする。

そりゃあそうだろう。オレと親父は、オアシスのテントにおいていかれたはずなのだから。しかも場所は、オアシスを少し離れた東の岩場だ。

「…悪いけど」

オレは息を吐いた。

「全部、聞いてたから」

「…」

「何で置いていくんだよ! オレたちだってヘスペリデス国民なんだぜ!」

「…」

王子とドクターは何も言わず、困ったようにふたりで顔を見合わせる。

「…仕方ないわね」

ドクターは、下ろした髪をかきあげた。

今のドクターは、ローブじゃない。アップにしていた長いストリートヘアはおろされ、服装もまるで女神官だ。淡いブルーの下地にさまざまな呪文が縫われ、護符や魔よけのアクセサリーがつけられている。肩からは紺のマントが下げられていて、足元もブーツで保護されている。医者の姿とはまるで別人だ。

ドクターは、ドクターじゃなかったのか？ いや、今はそれどころじゃない。話は後でも聞ける。

「おい、ミラ」

「諦めなさい、マルス。この父子、きっと梃子でも動かないわ。…昔のあなたと、同じ目をしているもの」

ドクターは、強く言ったわけではない。圧力があつたわけでもない。ただ静かに、でもどこか悲しそうに…微笑んだだけだ。

「王子。ドクター」

親父が、口を開いた。

「おふたりは何か、我らに黙っていることがあるのではないですか」

「そうだそうだ！ 蚊帳の外なんてズリーゼ、ふたりとも！」

オレもこぶしを振り上げる。

「わかったわかった。全部話すわ。いいでしょ、マルス」

「…やだつつつても、話すだろ」

わかってるじゃない、とドクターは笑ってから急に真顔になり、オレと親父の顔を交互に見た。

「はじめに言っておきます。…楽しい話には、絶対ならないわよ」

* * *

オアシスに戻り、王子の術を火種にしてつくった焚き火をオレたち3人は囲んでいた。いつもなら、とくに寝ている時間。眠くないといったら嘘になるが、今はドクターの話を聞くのが先決だ。

王子はオアシスに戻る途中から、まったく言っていないほど口を

開かない。ぎゅつと一文字に唇を結んで、目線はどこか遠かった。そしてドクターの話が始まる気配を察すると、いつの間にか姿を消してしまっていた。ドクターいわく、思い出したくないのだろうということだ。

「この話をはじめる前に、注意したいことがいくつかあるの」

ドクターの右手の人差し指が、スツと立った。

「ひとつ、さっきも言ったけど楽しい話にはならないわ。人の生死の話もある」

次いで、中指が伸びた。

「ふたつ、他言無用であること。今はわたしたちしかいないけれど、王国が戻ったとき、たとえ王国の重役だろうと漏らさないでちょうだい。わたしとマルス、それにここにはいない仲間が隠し通してきた、5年間だから」

さらに、薬指が並んだ。

「みつつ、これが一番重要なんだけど…降りるなら今、ということ」ドクターの目が、オレと親父を交互に捕らえた。

「正直、わたしたちにも今後どうなるか分からないわ。最悪のシナリオは、仲間の仇も討てず、王国も取り戻せず、砂漠の鐘を持ったあいつらがこの大砂漠の帝王になってしまうことでしょうね。けどそうなる可能性もゼロじゃない。むしろ、十分ありえることだね。今なら話を聞かず、知らないままでしたら、少なくとも奴らに狙われることはない」

ドクターの右手が、静かに下ろされた。

「注意点としては、この3つ。…どうする、聞く？」

何をいまさら、といったものオレだったら軽く流していたであろう質問だった。

だけどドクターのすみれ色の瞳は、真剣だった。ことの重大さを痛感しているからだろう。オレは親父を見上げた。親父はまっすぐドクターを見つめ返していた。

「聞こう」

低いバリトンの声。どつしり構えた親父のその頷きに、オレは近衛騎士団団長という肩書きは伊達ではないことを感じ取っていた。

親父の返事を聞き、ドクターは深く息を吐く。それから顔をあげ、頷いた。

「どこから話したらいいかしらね……」

ドクターが、宙をにらむ。

「……結論から言えば、わたしとマルスを入れて……仲間は5人いたわ。けれどそのうちふたりが、5年前、死んでしまったの。その死の原因になった抗争の相手が、今回の事件の首謀組織よ。少なくとも、私とマルスはそう考えてる」

そして、ドクターは静かに話し始めた。

「わたしとマルスが出会ったのは、5年前の雨季が終わってすぐの頃。マルスが飛行の術の制御に失敗して、うちの庭に墜落してきたの。……わたしにとっての始まりは、その日だったと思う」

それから王子は、ドクターの家へ出入りすることが多くなった。もちろん時間は、王子が寝室に引込んでからの夜。

「ある日マルスが、傷だらけになって死に掛けている男を連れてやってきたの。……団長なら、覚えているんじゃないかしら。ヘスペリデス王国が特に危険視していた盗賊団が、あるとき謎の壊滅をした事件……」

「！ “ガイア” か！？」

親父が声を荒げた。

盗賊団“ガイア”——ヘスペリデス王国の中で最大の規模を誇る組織で、当時、王国の兵隊たちも躍起になって追っていた連中だ。けれどある時、王国のあちらこちらで抗争の跡が残され、盗賊団は全滅。首領は死体こそ見つからないものの、致死量に近い彼の血痕だけが大量に残されていた。目立つ風貌にも関わらず目撃例すらないまま5年が過ぎ、王国もすでに、首領も含め“ガイア”は全

員死亡で幕を引いている。

「その近くを通りかかった時に巻き込まれたみたいでね。よりにもよって、首領がいた拠点の付近だったようだ。もっとも、何があったのかは知らないみたいだけれど。その時マルスと一緒に彼を連れきたのが、“ガイア” 壊滅に一躍買った、ツアイって男だった」
通報しろよ、とツツコミたいのはやまやまだが、今はそんな話ではないらしい。ドクターの話の流れに任せることにする。

「その日からよ。彼らがうちに出入りして、マルスと夜な夜な遊ぶようになつて… いつの間にか、変な連中がマルスの周りで不穏な動きをはじめたのは」

それが例のキメラたちを造ったやつらよ、とドクターは続ける。

「王子ということに気づかれたか、並外れたルックスをよからぬことに利用しようとしたのか、はたまた魔力の強さに目をつけたのか。それは今でもよく分かっていないの。だけど仲間たちは優秀なボディーガードだね。ことごとく負かされていたみたい。… でも実は、仲間の中には女の子がわたし以外にもいてね」

女嫌いの王子の仲間に、女がふたり。それは王子にとって性別を越えた仲だったのか、それとも――

「彼女の名前は、マリアナ。… マルスの恋人だった人よ」
一瞬、時が止まった。

王子に恋人がいたなんて初耳だ。あのルックスだし、一般人だったら、いても不思議ではない。けれど、王子は有名になるほどひどい女嫌いだ。それに王子には大きすぎる身分がある。生真面目な王子がそんな一大スクープを許すはずがないのに。

「それだけ、マルスもマリアナに惚れ込んでいたんでしょね」
ドクターはそこで、一息つく。

「でも、わたしたちが敵対していた組織は… 標的をマリアナに定めてた」

焚き火が、パチンと大きくはじけた。

「正確には、最大の狙いはマルスよ。だけどマルスを動かすには、

マリアナを手中に収めたほうが交渉しやすい。マリアナは魔導にとくて、わたしたちの中でも戦闘力が一番低かったから。マルスを守るために戦って、マリアナをかばうように戦って…」
ふう、とドクターは息を吐く。

「だけど、いつまでも続かなかったわ。…一番強くて、一番逃げ足が速くて、一番死ななそうなツアイっていう仲間が…マルスをかばって死んでしまったの」

「ツアイ、って…ガイア壊滅に一躍買ったほどの男なんだろう!？」
親父の叫びに、ドクターは静かに頷く。

「ツアイを亡くしたわたしたちの動揺を突くように、連中は押し寄せてきた。わたしたちは…」

ドクターの表情は、何も感じ取らせない。しかしその両手は、ぎゅっと強く強く握り締められていた。

「わたしたちは、マリアナも守れなかった…」

「あの日から、マルスは変わった。…いいえ、マルスだけじゃないわね。わたしも、神官をやめてしまったし」

自嘲気味に弱々しく笑うドクターに、オレは眉を顰める。

「神官？」

「わたし、もとは神官だったのよ」

この服を見ればわかると思うけど、とドクターは付け足す。

「でも仲間を失って、神官でいられなくなってしまったの。…神を、信じることができなくなってしまったから」

神官は、神に仕える職業だ。神と人をつなぐ仕事。その人が、神を信じなかったら…。

「だって5年前の当時、わたしはずっと必死になって祈っていたんだもの。でも結果は…ああだった」

ドクターは大きく息を吐いた。

「わたしは神を信じない。願っても信じて、奪われるときは奪わ

れる。神なんて助けてくれやしないわ。教えなんて、ぜんぶ嘘っぱちよ。だからわたしは、神官をやめた。代わりに医者になった。だけどその道すら、外れようとしているわ。…いえ、もうとつくに外しているかもしれないわね」

医者は誰かを救う者。だけど彼女は、他人を倒すことを決めている。大事な仲間を奪った、憎い連中を。

「でもそれは、わたしが自分で決めたこと。神官としても医者としても最低だわ。わたしに、人を助ける資格なんてないんだもの。今の格好だって別に、医者捨てて神官に戻ろうとしているわけじゃない。これがわたしの戦闘着なの。神官でも医者でもない、ミラ＝ウエイル個人になるための」

「・・・」

「マルスだって…別に今の姿が本性で、王子様の姿が偽りだってわけじゃないわ。5年前のあの瞬間まで、マルスはずっと敬語だったし、誰かを傷つけることにすごく臆病だった」

何度言っても敬語が治らなくてね、とドクターは苦笑する。

「だからどっちもマルスなのよ。ただ、今の姿は…戒めもあるんじゃないかって、わたしは思ってるわ」

「いましめ？」

「マルスはずっと、仲間ふたりの死は自分のせいだって思ってる。

…ツアイが生前、よくマルスに自分の喋り方を教えようとしていてね。当時は絶対やらなかったんだけど、あの事件以来、一人称も口調もがらっと変えてきたの。まるで、ツアイを忘れるなつて、自分に言い聞かせているみたいで…初めのころは、見ていて辛かったわね」

「悪かったな、見苦しくて」

何だか久々に感じてしまうその声に振り返ると、いつからそこにいたのか、王子がオレと親父の後ろに立っていた。

王子はオレとドクターの間に腰を下ろすと、話は終わったか、とドクターに尋ねる。彼女が頷いたのを確認してから、

「【黒のオアシス】のことなんだけど…」

その言葉を聴いて、ドキツとする。

さっき引き止めたものの、王子とドクターが行こうとしていた敵陣だ。

「俺とミラは、明日、そこに乗り込むつもりです」

王子の視線は、焚き火に向いていた。

だけど、わかる。王子は親父に、どう行動するつもりか確認しに来たのだ。親父が何と言おうと、自分は勝手に敵陣につっこんでいくと。そのうえで、あなたはどうするんですか、と。

もちろん親父も、そのことは分かっている。大きめのため息をひとつつくと、

「何度も言わせて頂きますが、あなたの行き場所が、私の目指すところですよ。王子」

王子はその答えに、一瞬だけ、複雑そうに微笑んだ。

ドクターから重い話を聞かされた翌朝。オレたちは王子とドクターがふたりで行くはずだった敵のオアシスに、並んで立っていた。4人で話し合った結果だ。

本当は、戦術を持たないオレだけ置いていかれるはずだった。だ

けどオレはひたすら食い下がり、「置いていつて下手な行動されるより、連れて行って多少の足手まといになったほうがマシだろ」の言葉で3人は折れた。本当に何をやらかすか不安になったらしい。主に親父が。

もつともオレは、足手まといになるつもりはない。オレだって何か、役に立つことがあるかもしれない。小さな穴にもぐりこむとか。...

なんか言ってて悲しくなってきたから、やめよう...

「ほう。思ったよりも早く来たな」

聞き慣れぬ声がしたかと思うと。

オレたちを取り囲むように、砂が盛り上がった。地面から現れたのは、モグラみたいなキメラたち。しかし、

「掘れ（ディッグ）！」

王子が、察していたかのように術を放った。

オレたちを円の中心にして、ドーナツのように砂が地面に飲み込まれた。それによって出来た穴に、キメラたちは埋まった。

グランド・スウェル
「大地隆起！」

王子の術が発動するより少し早く、ドクターは両手を地面につけ、キメラたちが穴に埋まったところで呪文を放った。

砂が波打ち、あと一步まで来ていたオアシスへ向かいだす。そして地面に触れると同時に、大地が突然、大きく揺れた。大地は波立ち、新たに迫っていたキメラの集団を吹き飛ばす。

うわわわわ！ こ、このふたり手際よすぎだよ！！

けれど気づくと、隣にいたはずの王子の姿がない。あれ？ と思っ
っている間に、

ダイク・ブレイク
「魔力剣！」

埋まったキメラたちを乗り越えて、王子は腰の剣を抜く。

キン！

王子の剣と、男の錫杖がかみ合った。

いつの間にか、黒尽くめの男がひとり、そこに立っていたのだ。

闇色の神官服に同色のマント。年は王子たちより三十路に近い。ボサボサに散った髪、目つきの鋭い男だ。

「剣の腕はなまっていないようだな」

男が不敵に笑う。この声、さっきキメラたちを呼んだ声だ。

「だが、相変わらず詰めが甘い」

罅迫り合いをする王子の後ろに、細身のキメラが砂から現れた。

「マルス！！」

術を放ったばかりでフォローできないドクターが、気づいて叫ぶ。

「王子っ！」

ドクターにかけてもらった魔力剣で、キメラのツメを受けながら、親父も声をあげる。

「ちっ！」

王子は振り返りざま、キメラを横なぎにする。

キメラは倒した。だけど、それまで向かい合っていた相手は。

「ほらな。昔から、おまえは隙だらけだ」

後ろから、男が王子の首を錫杖で捕らえていた。

「王子！！」

オレが叫ぶと、

「ああ。そういえばガキがひとりいるらしいと聞いてるな」

男はちらりとオレを見て、どうでもよさげに呟いた。

むかつ。

「ガキだからってバカにすんなよ！ てめー王子に何してんだ、離せよ！！」

突進しようとしたオレは、親父にあっさり捕まった。

しかし王子とドクターは、表情に余裕がある。ドクターは小さく息を吐き、

「マルスもまた、ずいぶん元気な子を見つけてきたもんね。…さて、と」

そりゃオレのことかよ、ドクター！

彼女は視線をオレから男に戻した。

「この前は聞きそびれてしまったけれど。…今更、わたしたちに何の用かしら？ デネボラ」

デネボラ。ドクターは黒尽くめをそう呼んだ。その名前は一度だけ、聞き覚えがある。あの、王子とドクターがふたりだけで攻め入ろうと相談していたとき。あいつが来たのか、と王子が異常に反応していたんだ。

「聞くまでもないだろう、女神官」

デネボラは、王子の髪の手束に左手をかけた。

こいつ、ドクターが神官だったことも知ってるのか!?

「俺たちの狙いは初めからずっと、ヘスペリデス王国の第一王子マールデイルスだ」

「…なら、残念だな」

平然と王子は言い放つ。

けれどオレと親父は、おかしいと気づいた。

違う。王子の声じゃない。王子の声は、こんなに低くない。もっと、耳に心地よい声だ。今の声は、オレの知らないものだった。

「何?」

デネボラも、気づいたようだ。途端、

「炎よ!!」

デネボラの足元が、急に燃え上がった。デネボラは素早く跳びよけたが、そのせいで王子とも離れてしまう。

「貴様ら…入れ替わっていたのか!」

「残念だったな、デネボラ」

声のほうを振り向くと、オアシスにそびえていた大岩の上に人影があった。

服装こそいつもと違い、ライムグリーンのマントに黒い貫頭衣だが、右手に炎を宿らせこちらを見下ろしていたのも、…王子だった。えええ! 王子がふたり!?

「おまえには、聞きたいことが山ほどあるからな」

声が違う方の王子が、自分の顔の触れる。すると、ぱきんつと音を

立てて崩れ落ちてしまった。その下から現れたのは、少々女顔な男の表情。左の頬にある大きな傷が女顔を半減させている。

その手でマントの中から小さなビンをひとつ取り出し、中の液体を頭にかける。じゅう、と音を立てて彼の髪色は、金から若葉色へと移る。長かった髪も引っ込んで、短く刈られた髪型に変化した。

「洗いざらい吐いてもらうわよ」

ドクターも、デネボラをにらみつけた。

その間に王子も岩から降りてきて、3人がデネボラを取り囲む形になった。あのー、すいません。すっかり状況に置いてけぼりなんですけど。

「答えろ、デネボラ。“砂漠の鐘”を、どこへやった」

剣を抜き、切っ先をデネボラへまっすぐ向けて。王子は、デネボラに詰め寄った。

「鐘？ …ああ、砂の動きを支配するっていうあれか」

「やっぱり犯人は、あんたたちだったのね」

ドクターの言葉に、デネボラは、ほう、と片眉をあげた。

「気づいていたのか。証拠は残さないようにしていたつもりだが？」

「城や国のやつらならともかく、俺たちが気づかないとも思ったか？」

偽王子が、デネボラをにらみつけた。

「いくらヘスペリデス城が開かれた城であるといっても、鐘のある部屋まで行けるのは王族とその側近だけだ。しかも騎士団や魔導士が集中し、おれたち3人も目を光らせていた。そんな中に入り込めるのは、おまえくらいだろう」

「お褒めに預かり光栄だな。だがおまえはひとつ、間違ってる」

デネボラは、右手の人差し指を1本立てた。

「おまえらふたりが目を光らせていたのは、おれたちに対してじゃない。王子に対してだろう」

「・・・」

「こいつは目を離すと何をしでかすか、分かったもんじゃないから

なあ。5年前のように、な」

「黙れ、デネボラ」

押し殺した王子の声が、鋭く通った。

「あんたの揺さぶりは、もうじゅうぶんよ」

ドクターは、吐き捨てるようにそう言いつと、一歩デネボラに踏み出した。

「もう一度聞け。 “ 砂漠の鐘 ” はどこ？」

「砂漠の鐘か。今回のおまえらの狙いはそれだったな」

「ニヤ、とデネボラは嫌な笑みを見せた。

「鐘ならお上が持つてるぜ。おれは盗んただけだ。…それより」
自分を囲む3人を見回し、余裕の口調だ。

「5年ぶりに、勝負しようぜ。マルス＝アルカス」

錫杖の先に立つ王子の額に、青筋が1本、ビキ、と立った。

この男、王子の怒りのツボをよく知ってるみたいだ。一言一言、
いちいち王子の神経を逆なでしている。残念ながらオレには、どう
して王子が怒るのか分からないんだけど。

「ダメよ、マルス！ 挑発に乗るんじゃないわよ！」

ドクターが声を荒げた。

しかし。ざわり、と辺りの空気が急に動いた。

「どうした、ルナータ」

辺りを見回すオレの様子に、親父が尋ねてきた。

親父は、感じなかったのか？ 今の変化を。

「ブラスト・アロー（突風の矢）！」

偽王子の放った術がこちらに飛んできて、砂から現れたキメラを瞬
殺した。オレたち父子を取り囲む形で、キメラの群れがまたやって
きたんだ。

ボム・ブラスト
「爆風！」

「清めの気！」
カタルシス

偽王子とミラの姉貴、そして魔力剣を剣にかけてもらった親父の3人は、倒しても倒しても湧いてくるキメラたちを相手取る。その間に王子とデネボラは、一騎打ちになっていた。

キン！ と金属音を響かせ、王子の剣とデネボラの錫杖がかみ合った、一時だけ鏖迫り合いをして、すぐはなれる。

しかし王子はまた、デネボラへふみこんだ。横薙ぎにした剣をデネボラは、錫杖で受ける。その腹に王子の蹴りが飛ぶけれど、後ろへ跳んでかわし、錫杖でつくった軌道に王子の剣筋をのせる。王子はそれを上回るスピードを剣にのせ、また大きく前に出る。

いつだったか、親父が言ってた。「剣の太刀筋には、使い手の性格が出る」って。王子の太刀筋は、凄く攻撃的だ。防御は最低限しかしていない。攻撃は最大の防御、を地で行く戦い方だ。守りをそのまま攻撃に転じている。

デネボラは立てた錫杖で、王子の袈裟斬りを受け止める。

「相変わらず攻撃的な剣だな。そんなに俺が憎いか」

そう、告げた途端。

王子の目が、変わった。

例えるなら、獲物を見つけたときの飢えた肉食獣だろうか。ギラギラ光る紅い瞳が、炎のようにゆらゆら揺れる。

「マリアナとツアイを奪った俺たちが、そんなに憎いか」

ふたりがまた、距離をとる。

「それとも、ふたりを守れなかった自分が憎いか」

デネボラの突きを、王子は剣で軌道をかわし、デネボラの懐にもぐりこむ。

「いや、憎いのは助けられなかった仲間たちか」

デネボラは錫杖の柄を、懐に來た王子に向ける。王子はそれを肩越しに、剣で受けた。

「違うな。おまえが本当に憎んでいるのは、この世界だ」

デネボラは、王子の腹を蹴り飛ばした。

王子は反転して威力をころし、剣をデネボラへ突き刺した。剣先は刺さりこそしなかったが、デネボラの白い頬に赤い筋を1本つけた。

「マリアナやツアイをおまえと引き合わせ、戦わせ、王子という身分に縛り付ける、この世界」

——わたしたちは、守りきれなかった…。

「おまえの憎しみは、世界に向いているだろう」

頬を伝った赤い血をひとなめし、デネボラは不敵に笑った。

王子の顔が、カッと赤くなった。さつき以上の速さで、デネボラに斬りかかる。攻防一体、なんてもんじゃない。今の王子は、完全に守りを捨てていた。

デネボラの錫杖が自分をどう傷つけようが、知ったこっちゃないようだった。王子はただただ、剣を振るう。そのうちデネボラは防戦一方になってきた。

ガキン！ 噛み合ったとき、嫌な金属音が耳を突く。デネボラの手から長さの半分となった錫杖が離れ、足をとられて仰向けに倒れこむ。

やった、王子！

そう、駆け寄ろうとしたんだ。本当は…だけど。

デネボラはすぐに、身を起こそうとした。しかし王子は、王子の剣で刺されたデネボラの赤黒く染まった肩口を、ガッツ！ と蹴りつけた。

その、デネボラを見下ろす王子の顔が、あまりに怖くて。オレは、

出しかけた足が止まった。いつもの、優しい王子じゃない。いたずらっ子みたいに笑う顔じゃない。ふてくされた子どもみたいな表情じゃない。それは、オレの見たことのないもので。

王子は、デネボラを——殺す気だ。

「しばらく会わんうちに、剣筋が変わったな」
額に脂汗をうかべ、デネボラは告げた。

「その剣は、人を殺したことがある剣だ」

「だったら、何だって言うんだ」

しかし王子は、デネボラの言葉に動じなかった。

王子…

否定、しないの？

何で、そんな顔ができるんだ？

王国が、砂の下に埋もれてしまって。家族も友も生活もすべて奪われて。

その代わりに、王子と出会った。

この短い期間でオレは、王子が大好きになっていた。

憧れて、懷いて、兄のように慕っている。

でも今は、王子が恐ろしい。

まるで知らない人みたいで、怖かった。

「正直、今すぐここで貴様の首を飛ばしてやりたいさ」

チャキ、と王子は自分の剣を、デネボラの首筋に当てた。

「…だがまだ、訊かなきゃならないことがあるからな」

いつの間にか、周りのキメラたちは倒されていた。

ドクターと偽王子は、しまった、という顔でふたりを見ている。

親父は信じられぬ光景に、わが目を疑っている。オレだって親父と一緒にだ。

「5年前のこと。マリアナとツアイのこと。“砂漠の鐘”のこと。

…おまえらの目的も、黒幕のことも、全部だ」

「——マルスー！」

突然だった。

偽王子が王子に、タツクルをかましたのだ。不意打ちだった王子は吹っ飛ばされる。しかし偽王子の二の腕が急に裂かれ、鮮血がほとばしる。

「トウバン！」

ドクターが叫んだ。どうやらそれが、偽王子の名前らしい。

何が起こったのか、オレにはさっぱりだった。その間にデネボラは大きく跳び、距離をとる。

「っはは、惜しかったな」

赤く染まった自らの肩口を押さえ、デネボラは笑う。

「ここまでおれを追い詰めた褒美だ。黒幕を教えてやろう」

「名は、『アンタレス』。——マーデイルス王子なら、知ってるんじゃないか？ その名を」

ボム・ブラスト
「爆風！」

ドクターが放った術は、デネボラを守るように出現した黒い壁に阻まれる。それが消えてなくなったとき、デネボラの姿はもう、どこにもなかった。

第5幕 火竜伝説

むかしむかし、この世界ができたばかりの頃。大地は炎に覆われていた。

土も木も草も存在せず、ただひたすら燃えていた。だけど。

その何も生まれるはずのないこの世界で、たったひとつ生まれたものがあつた。

“生まれたもの”はその体に炎をまとい、飲み込み続けた。

いつしか炎は飲み込みつくされ、“生まれたもの”も姿を消していった。

世界には土が肥え、花が咲き、木が生え、ヒトが栄えるようになっていた。

“生まれたもの”の行方は知れない。

最後の行き先が、ヘスペリデスのあるこの大砂漠だったというのが一番有力である、と云われているだけだ。

人々は、“生まれたもの”へ恐怖を抱き、この創世記をこう呼んでいる。

「火竜伝説」…と。

第5幕 火竜伝説

エクスボード
「爆発！」

ドクターがかざした右手の延長線上にあった岩場が、派手に崩れ落ちた。かすかに鼻を突く焦げた匂い。

「うーん……」

ドクターは腰に両手を当て、形の良い眉を顰めた。

砕けた岩場にあったのは、不自然な空洞。

「どうやら奴ら、しばらくここにいたようだけど……手がかりを何も残してないっていうのは、腹立たしいわね」

まあ初めから当てになんてしてないけど、とドクターは息を吐く。

デネボラを退けた後の、【黒のオアシス】だ。ドクターと偽王子もといトウバンさんは、それぞれオアシス内をいろいろ調べまわっている。

トウバンさんはどうやら、オアシスに来る直前の晩、王子と入れ替わったらしい。王子とドクターは彼を、仲間の風魔導士だと紹介してくれた。この「風」で声も変えていたそうだ。

「トウバンだ。話はマルスから聞いた」
にこりともしなかったけど、王子とドクターが言うことにはいつもそうらしい。

王子はと言うと、オアシスの水辺の方でひとり、ぼんやりしている。あの後ドクターに傷を手当してもらっていたので、今はもう傷跡ひとつない。けれど何となく近寄りがたくて、オレはドクターたちの方についてきたんだけど。

「ルナータくん、マルスの様子みてきてくれる？」

ドクターに言われちゃ仕方ないよな。

それにしてもドクターって、見た目は優しそうなお姉さんなのに……中身はけっこう姉御肌である。神官の衣装も合わさって、「ドクター」って呼ぶのに何だか抵抗が出てきたほどだ。まあ、ドクター

はドクターなんだけど。

さて。

オレは岩場を離れ、水辺の方へと向かう。そう大きくもないオアシスだ。すぐに王子は見つかった。水際に生える細い木を背に、その木の枝葉が作り出す日陰で座っていた。こちらからは後姿しか見えないが、何か紐のようなものをぶら下げ、陽にかざして見つめているようだ。

「おうじ！」

オレが声をかけると、王子は手を下ろしてこちらを振り返った。

「ルナータか」

「具合どお？」

「まあ…悪くはないよ」

そう苦笑する王子の隣に、オレは腰掛ける。熱い陽射しは木で遮られ、だいぶ涼しい。オレはフード代わりの緋色の布を頭から外し、首に戻した。

ドクターやトウバンさんと合流してから、王子はオレにもふたりと同じような口調で話しかけてくれるようになった。どうせふたりには王子姿を見せるのは照れくさいし、そうするとオレにも見られているから、早々に諦めてこっちの口調で統一することにしたらしい。もつとも親父には、相変わらず敬語だけど。

オレは、王子が見つめていた手元に視線を向けた。王子の手にあるのは、赤い石のようだ。

「…ああ。これ、見るか？」

オレの視線に気づいたのだろう。王子は持っていた赤い石を差し出してくれた。オレはそれを手にとって、見つめてみる。

大きさは親指と人差し指で挟めるくらいで、案外小さい。色はワインレッドの半透明だ。形はちよつといびつというか、ゴツゴツしている。色を除けば、そこらへんに転がっている石ころとそう変わらないだろう。それに麻の紐を通してある。

「これはな、ヘスペリデス王国の王族にだけ伝わるものなんだ」

オレが石を返すと、王子はそう教えてくれた。

「この石が？」

「石じゃないんだよ。…樹脂ってわかるか？」

「あれだろ、木から出る蜜みたいなヤツ」

オレが答えると、王子は頷く。

「竜血樹って木があつてさ。その木の樹脂は赤くて、竜の血に例えられてそう呼ばれるんだ。これは、それが固まったものだよ。紅蓮^{シナバル}石^{バル}っていうんだ」

「これが樹脂！？」

オレはもう一度、往時の手にあるそれをしげしげ見つめた。

うゝん、石にしか見えん…。

「おっと。これ、本当は王家の秘密だから。内緒だぞ」

王子は口元に立てた人差し指を持っていき、笑った。

いいのかよ、国家機密をオレなんか教えて…。

「いいの、いいの」

王子は紅蓮^{シナバル}石を首に下げ、服の中に隠してしまった。

「俺の他に跡継ぎはいないからな。俺が持つしかないだけだよ」

…こうしてみると、いつもの王子だ。普通に笑うし、からかわれると不機嫌そうに顔を顰めるし、オレにも優しく微笑んでくれる。

でも、何でだろう。なぜだか知らないけど、オレには分かってしまった。きつと、ドクターやトウバンさんもそうだろう。だからふたりは、王子をひとりでそつとしておいたんだ。

こうやって何ともないように笑っている王子も、実は仮面なんだつて。そうやって仮面を重ねて、重ねて。

そのたび王子は、…傷ついているんだ、つて。

「…あ、王子って一人っ子だっけ」

オレはあわてて話をつなぐ。

「母上が小さい頃に亡くなったからな。父上も、再婚するようないともなかったし」

あんな大きなお城に子どもひとりじゃ、息詰まるだろうな…。

「そういえばルナータ、妹がいるんだって？」

おそらく親父にでも聞いたのだろう。

「うん、リアっていうんだ。3つ下だから、9才だよ」

オレもリアも顔は母親似だから、けっこうよく似ているらしい。自分じゃわからん。

「いいよな、兄妹がいると。ミラも一人っ子だし、トウバンは家族の話はしたがないから」

「でもさ、何か情けないよ」

オレは息を吐いた。

「砂嵐が来たとき、親父に『母さんとリアを守れ、兄だろう』って言われたのに」
呟くと。

ぼん、と王子の暖かい手が、オレの頭に乗せられた。

「ルナータは、頑張ってるさ。小さな体で、俺たちにくつついて砂漠を歩き回っているんだから」

「でもオレ、すぐ疲れるよ。熱中症にもなりかけたし」

「それは仕方ないだろ。何だかんだ言っても、おまえはまだ12歳の子どもなんだから。俺たちとは体格が違うだろ」

「そうだけど」

「焦らなくていいんだよ。戦えなくたって、ルナータにはルナータにしかできない役目がちゃんとある。今は見えないかもしれないけど、いつか必要とされる時っていうのは来るもんさ」

「・・・」

「といっても、不満そうだな」

オレの顔を見て、王子は笑う。うるせーやい。

「そうだな。じゃあ・・・」

王子はオレに、こっそりと耳打ちを...

・・・。

「どうだ？」

に、と笑う王子の顔。オレは即座に右手をまっすぐ上げて、

「お願いしまッス！」
よし来た、と言う王子もどことなく、嬉しそうに見えるのは…オレの、自意識過剰かな？

「マルス」

名を呼ばれ、王子は振り返る。

「トゥバン、どうした？」

言いながら、王子は立ち上がった。トゥバンさんは握っていた左手を開き、

「こんなのが落ちていた。見覚えあるか？」
差し出したのは、ペンダントだった。

楕円フレームに、5弁の花があしらわれたセピアなロケットだ。
これは確か、砂漠のバラ（デザート・ローズ）。特に何の変哲もないものだ。

けれどそれを見た途端、王子の表情がこわばった。トゥバンの兄貴からロケットを受け取り、開いて中を確認する。

「王子？」

様子がおかしい。オレは尋ねてみるが、王子は無言のままだ。パチン、とふたを閉じた王子の紅い瞳が、鋭く光る。

「…やっぱりか。中を見て、まさかと思ったが」

トゥバンさんは王子の様子に驚くこともなく、そう告げる。

「中の写真。おまえと、おまえの両親だろう」

「…ああ」

険しい表情のまま、王子は頷く。

「これは母上の形見として、父上が大事にしているものだ。こんな所に落ちているはずがない」

王子の言葉に、オレはごくりと喉を鳴らす。

国王は、王国と一緒に砂嵐に飲まれたとばかり思っていた。でもその国王の持ち物が、デネボラのいたこのオアシスに、これ見よがしに落ちていた。ここから導き出せる答えは、ひとつしかない。

「団長に言ってくる。どこにいる？」

「ミラと一緒に、まだ岩場だ」

わかった、と王子はひとりでそちらへ歩き出す。

残されたのはオレと、トウバンさん。

「王子、大丈夫かなあ……」

「この程度で潰れるような軟いヤツなら、5年前とつくに死んでる」
トウバンさんって、容赦ない。

「それよりルナータ、マントの止め具を貸せ」

言うが早いか、トウバンさんはフード代わりの布を止めているシルバーの金具を勝手に外し、懷から出した針のようなもので何やら彫りだした。

オレはトウバンさんの手元を覗き込んでみる。針の彫った場所は赤く光り、オレには理解できない紋のようなものを刻んでいる。最後にフツと鋭く息を吹きかけると赤い光はおさまって、同時に紋も見えなくなった。

よし、とトウバンさんは呟いて、止め具を付け直してくれた。

「何したの？ トウバンさん」

尋ねるとトウバンさんは、ぴくりと片方の眉を上げ、

「……トウバン、でいい」

ぼそりと告げる。といわれても、呼び捨てにするのは何だかなー。

「じゃあ、トウバンの兄貴でいい？」

「……好きにしる」

OKが出たので、そう呼ぶことにする。それで止め具に何したの、ともう一度尋ねると、

「風の紋を刻んだ。これで砂漠歩きも少しはマシになるだろう。これからまた、しばらく歩くからな」

マルスに話は聞いたから、とトウバンの兄貴は言う。何のとは言わ

なかったがおそらく、砂漠でオレが熱中症になりかけたことだろう。
「ありがと」

へへ、とオレは笑って礼を言う。
けれど。

そのときトウバンの兄貴は、何かに驚いたように顔をこわばらせた。しかしそれも一瞬で、すぐに元へ戻ってしまふ。

…なんだったんだろ、今の。

* * *

「炎よ」

王子の呼びかけに応え、その右手に炎が宿る。それを火種とし、トウバンの兄貴がささっとくみ上げた焚き火は赤々と、暗くなり始めた辺りを照らし出した。

「トウバンの兄貴、焚き火つくるのうまいな」

「まあ、慣れてるからな」

あっけらかんと兄貴は言う。慣れてるって、旅でもしてたのかな？
「…で、これからどうする？」

ドクターは焚き火にシチューの具材を入れた鍋をかけ、いきなり本題を振った。

焚き火を囲んで座る全員の視線が、自然と王子へ向く。当の王子は火を見つめ、黙る。

「…ここから南へ行ったところに、竜の眠る岳ドラゴン・ピークと呼ばれる峰がある。そこに行こう」

しばらくして、王子は静かに口を開いた。

「父上が奴らに捕まっているなら、狙いはだいたい読める。でもや

「つらはそれを知らない」

…何言つてんのかさっぱりだ。でも、ドクターとトウバンの兄貴は分かるらしい。

「どういうことですか？」

オレと同じくさっぱりな親父が、身を乗り出して尋ねた。

「このヘスペリデス王国が、かの『火竜伝説』の舞台である可能性がある話は、団長もご存知でしょう」

火竜伝説――

それはこの世界の創世記。そして炎の術を多少なり使える魔導士が、史上でも片手で事足りるほどしか存在しない要因だ。

この世界が、「火」というものを恐れているから。

ヒトではなく、世界が。

「奴らの狙いは、火竜の復活です。その先に何を求めているのかまでは、分かりませんけれどね」

さて、えらいことになった。

ただの昔話としてしかとらえたことのないことを、さもそれが本当のことだ当たり前、という前提で告げられた。おいおい冗談だろ、っていうのが正直なところだ。

「ちよつと待って下さい、王子」

当然、親父も同じ心境だったようだ。

「火竜伝説といわれても…そもそも火竜が本当にいたのかすら謎でしょう。あれはただの創世記のはずです。そりゃあ火のないところに煙は立たぬと言いますから、元となった何かがかつてあったことは事実でしょうが…」

「ま、そう言いたくなる気持ちも分かるけどね」

息を吐き、ドクターは長いすみれ色の髪を掻きあげる。

「わたしたちだって、昔は信じてなんかいなかったわ。団長たちと同じでね」

「そうだな。あれは、分かる奴にしか分かるまい」

言いながら、トウバンの兄貴は長めの枝で焚き火をつつく。

平然を装っている。オレには、ふたりの様子がそう見えた。うん、何か…。

「まるで見たことあるみたいな口ぶりだな」

ふと感じたことを、口にただけだった。だけど。

びたり、とふたりの動作が止まった。トウバンの兄貴は火に枝をつつき入れたままなので、その先に小さな火が燃え移ってしまったている。ドクターも、掻きあげた手を下ろすのを忘れてしまったかのようにフリーズしている。

え、ドクターだけならまだしも、トウバンの兄貴まで!?

どうやらオレは、地雷を踏んでしまったらしい。王子といいこのふたりといい、「隠し事」がやけにウマイ。そのくせこんなあからさまなリアクションだ。

沈黙があたりを支配し、音は焚き火が火花を弾くときだけだ。口

を開くに開けない。

「…さすが、ルナータは鋭いな」

フツ、と笑ったのは、王子だった。

「あれは…、竜なんてレベルじゃない。化け物だわ」

ドクターはやつと右手を下ろし、そう告げた。

「わたしたちが見たのは、封印が解けてすぐの火竜だった。だからまだ本来の力の10分の1も出せていなかったようですね、何とか『封』の結界をぶち込んで抑えられたけど…思い出すだけでゾツとするわ」

「ああ。ミラが高位の神官でなかったら俺らは焼け死んでいただろうし、ヘスペリデス王国どころか世界全土が火竜の炎に喰われただらうな。…それでもミラは、力を使い果たしてしばらく寝込んだくらいだ」

トウバンの兄貴もフリーズを脱し、枝の先についた火を地面に刺して消した。

「あれは、人間が関わっていい次元の存在じゃない」

焚き火に照らされたふたりの顔色が青く見えるのは、決して月明かりのせいではない。今宵は新月なのだから。

焚き火の火が、ぱちんと弾ける。風にあおられたナツメヤシの葉が、頭上のはるか上の方でザワザワ音を立てている。吹いてくる風がまるで見えぬ何かに巻かれているようで、オレは思わず身震いした。

「…きつと父上が捕まったのは、奴らが“鍵”の正体を掴みあぐねているからだ」

腕を組み、沈黙を破ったのは王子だった。

「火竜の復活を握る鍵が何なのか、奴らはまだ知らない。あるいは掴んでいるのかもしれないが、まだ猶予はある。父上は絶対に口を割らないからな」

王子が視点を火からオレたちの顔にうつし、まっすぐ正面を見て告げた。

「王族のみ頂上へ行くことを許されている地がある。その結界は奴らに解くことはできない。だが、父上がいるとなれば話は別、そう考えるに違いない」

そして王子は焚き火とよく似た紅い瞳を光らせ、きっぱり告げた。

「次の舞台は、ドラゴン・ピーク竜の眠る岳だ」

第6幕 ドラゴン・ピーク

ヘスペリデス城からまっすぐ東に位置する砂漠に、城下町からも見える岳がある。

そこは常に雲がかかっていて、頂上だけが浮かぶように突起していた。山腹までは登ろうと思えば誰でも行けるが、頂上が近くなると結界に阻まれるという。うわさでは、歩いて歩いても同じところをぐるぐる回ってしまうのだとか。

本当なのかは知らないが、何でも大昔の五大神官と呼ばれた人たち……ヘスペリデス王国を中心に、北のヘルクレス、南のエリダヌス、東のカシオペヤ、西のペガサスの五大王国それぞれトップの神官たちが集まって、ひっそりかけた結界であるといわれている。ただしそこまではその頂上に何があるのかを知るのは、ヘスペリデス王国の王族のみだとか。

オレたちはその「竜の眠る岳」を意味する名を持った、“ドラゴン・ピーク”を目指し、砂漠を歩いている。

第6幕 ドラゴン・ピーク 竜の眠る岳

ドラゴン・ピーク 竜の眠る岳は今までオレたちのいた黒のオアシスから、そう離れた位置にあるわけではない。普通ならラクダを使って半日ってこ

ろだろう。

けれどオレたちは黒のオアシスを経て丸2日だ。ラクダはいないし町もないので、オアシスで水と食料を補給し、それを自分たちで運んでいる。さらに、行く手を阻む要因がオレたちにはある。

フレイム・ヴォーテクス
「炎の渦！」

王子の術で炎が渦巻き、熊型のキメラ3匹が輪の中に閉じ込められる。輪はきゅっとしまり、中にいた熊型のキメラたちは黒コゲになった。

バージ
「浄化！」

ドクターが放った術は、蛇型のキメラ2匹を白い光で包み込む。じゅっ、という音を立てキメラたちは灰のような粉になる。

ボム・ブラスト
「爆風！」

トウバンの兄貴の唱えた術は、虎のキメラの前で爆発するような強い風を巻き起こし、そのまま吹き飛ばしてしまった。

ミもフタもないなあ…。

出てくると同時に三方向から畳み掛けるようにやられてしまったキメラの群れへ、オレは心の中で合掌した。きっとこういうのを「瞬殺」って言うんだだろうな。

「親父…ダーク・ブレイク『魔力剣』の術、教えてもらえば？」

まるで出番のない親父へオレは提案するが、首を横に振られた。

「王子たちの死んだ仲間のひとりにツアイという男がいたろう。あの術はその男のオリジナルらしいんだが、やはり魔導の基礎がないと使えないそうだし…」

すでに諦めた後らしい。ドンマイ、親父。

しかし、いくら王子たちが強いといっても、キメラたちが出てくるたび足止めされる。数歩あるけばキメラが出て、倒してもそう進まないうちにまた現れる。その繰り返しで、一行はなかなか目的地へたどり着けずにいた。

「このペースで行っても、今日中には着けるでしょう」

今朝、王子はそう言っていた。しかしすでに太陽は南中からだいぶ下がってしまっている。空全体が、すでに赤い。東の空は暗くなってきたおり、昼と比べ気温もぐんと下がっている。

いつもこの3人の動きを見ると心底思うのだが、王子たちの戦い方は特殊である。騎士の戦い方とは、まるで違うのだ。

キメラが現れるとすぐ、3人はスッと動く。真ん中にドクター、左に王子、右にトウバンの兄貴と、位置が変えられる。

「マルス、炎はなるだけ抑えろ」

トウバンの兄貴が言うつと、

「そういうトウバンも、今回は魔導の種類、気をつけなさいね」

ドクターが横槍を入れ、

「ミラこそ無茶してミスるなよ」

王子が水をさした。

「じゃ、いつも通りに行くぞ」

王子、ドクター、トウバンの兄貴は息がぴったりだった。

トウバンの兄貴が術で砂を巻き上げ、キメラたちの視界をふさぐ。そこに「魔力剣の魔力をこめた剣を持つ王子が突っ込んだ。砂の壁を抜けた王子は、真正面にいたキメラを3匹、切り倒す。4匹目のツメを剣で受け止めたその背後に、キメラが迫る。しかし王子はまったく気にする様子もなく、後ろのキメラはドクターが放った白魔導によって浄化された。

オレにだって分かる。この3人の呼吸は、一朝一夕で合うようなものじゃない。王子が振り返りすらないのは、ドクターが術を放つと分かっていたから。相手をよほど信頼していなければ、とても無理だ。

こんな戦い方をされたんじゃ、王国一の騎士とはいえ、親父も手が出せない。下手すりゃ足を引っ張りかねないからな。

ファイアー・ボール
「火炎球！」

王子の炎にまかれ、最後の1匹が地に伏した。

「王子！」

日よけの下で休憩していると、ちよつと辺りを見てきますと出て行った親父が、砂丘の上から声を張り上げた。

呼ばれた王子は、親父の方へ歩を進める。オレも王子に続いた。

「どうしました、団長」

「…あれを」

赤くなり始めた空を横手に、親父は南の方角を指差した。

そこに聳え立つのは、細長い峰。針のようなそれは雲を突き刺し、頂上だけが浮いて見える。…王子に聞いた通りだ。どうやら、やつと着いたらしい。

ドラゴン・レーク
「竜の眠る岳…ですね」

王子の呟く声は、険しかった。

* * *

今日も砂漠に夜が来る。

日だけでなく気温も落ち、王子の出した火種でこしらえた焚き火でのみ暖をとる。頭上には、一度姿を消していた月がその細身を再び現していた。乾燥した大地に雲は滅多に出てこない。三日月は鮮やかにその姿を見せていた。

オレたちは、竜ドラゴン・ビークの眠る岳のふもとまでたどり着いていた。明日には、中腹の結界内に入れるだろうと王子は言う。みんなそれぞれ、焚き火を囲んで明日の準備をしている。親父は自分の両刃の剣を手入れしている。その隣でトウバンの兄貴は、体中に仕込んだナイフに紋を刻んでいる。

「あれ、王子は？」

「マルスなら岩場のほうへ行つたわよ」

そろそろ夕飯だから呼んできて、とドクターは鍋をかき回しながら言う。

オレは頷き、ドクターに教えられた方角へ向かう。
けれどその足がふと止まる。唄が、聴こえてきたんだ。

回る回る　唄流る

砂の大地に唄流る

山にそよ吹き　口遊ぶ

デザート・ローズ
砂漠のバラの紅は泣き

竜の子 静かに眠りつく

踊る踊る 花が舞う

砂の大地に花が舞う

山の辻風 身を任す

デザート・ローズ
砂漠のバラの萌えは咲き

竜の子 静かに眠りつく

流れからすると、子守唄のようだった。この声は王子だろう。岩場でひとり月を見ながら、王子は歌っていた。

「ルナータか？」

呼びかけられて、オレは王子のいるところまでよじ登る。

「今の、王子が歌ってたの？」

促がされるまま隣に腰を下ろして尋ねると、聴かれたか、と王子は苦笑した。

「小さい頃、母上が俺によく歌ってくれてたんだ。子守唄だったん

だろうな。…母上を思い出すとき、最初に出てくるのはいつもこの唄だ」

「ぱちん、と王子はロケットを開いた。母の形見だと言っていた、国王の持ち物。」

見るか、と王子はロケットを下げる。オレは頷いて、中を見る。

ロケットに入っていたのは、一組の親子の肖像画だった。少し古いものらしく、端の方が黄ばみ始めている。立っている若い男は、年齢こそずっと上だが王子にそっくり。マゼンタの髪を刈り上げて、臍脂のマントが良く似合っている。彼の手が乗せられた椅子に腰掛けて、いるのは、少し丸顔だけど、綺麗というより可愛い女性だ。ふわふわのロングヘアを編みこんだ彼女は穏やかに微笑んでいる。その髪は艶やかな金色で、瞳は太陽の陽射しのような紅色だ。そしてその膝には、やんちゃに笑う男の子。まだ5歳くらいだろうその瞳は好奇心いっぱい大きな金の目。糸のような髪を後ろで結い、母親に抱かれて元気な笑顔を向けている。

「17年前の写真だよ。この2年後、母上は病気で亡くなった」

ロケットを閉じ、丁寧に懐へ戻す王子の目は、どことなくさびしうだった。

「城にいるときも、寂しかったり辛かったりすると、ひとりでこの歌を歌ってさ…と、悪いなルナータ。こんな辛気臭い話」

オレは慌てて首を振る。

今、王子自身が言っていたじゃないか。そんな唄を口ずさんでいたってことは今、王子は辛いんだろう？ 5年前に大事な人をふたりも奪った仇が現れて。平和だった故郷を突然失って。唯一無二の肉親である父親が敵に捕まって。

それはきつと、王子の心にある大きな傷を、ナイフでえぐっているようなものだ。でも王子は、その辛さを口にしない。

「…大丈夫だよ、王子」

オレはすつくと立ち上がり、ガッツポーズで応えてみせる。

「王子もドクターもトウバンの兄貴も、強いだろ？ そこにヘスぺ

リデス王国一の騎士な親父がいりやあ鬼に金棒だつて！ 王様も黒神官もぺぺのぺ、だぜっ」

「国王までぺぺのぺ、してどうする」

王子は言いながら、笑ってくれる。

そして王子は、ふ、と笑いを止めてオレを見上げる。

「…やっぱりおまえは、似てるな…」

「え？」

「いや、なんでもない」

王子は立ち上がり、やれやれと一度月を見上げる。それからオレを振り返ると、いつもの通り優しく微笑んだ。

絵画にあつた、お母さんと同じ笑顔で。

「戻るか。そろそろ夕飯だろうし」

「あつ！ そうだオレ、ドクターに王子呼んでこいって言われてたんだつた！！」

「…もう俺らの分、ないかもな…」

* * *

オレたちがキメラ以外の理由で足を止めたのは、頂上も間近に迫った所まで登つたときだった。

時間としては昼を過ぎた頃。さすがにこの標高まで大量の砂を運び込む力は風はないのか、地面は岩盤が中心だ。目だった草木はなく、辺りにまとう霧によるコケがたまに足元をすくうくらいである。

そこに、ふたりの男が立っていた。

ひとりは藍の刈り上げヘアで、瞳の色は宝石のような碧だ。もう片方は灰色の髪を結い上げ、黒い瞳でこちらを見ている。ふたりとも20代後半といったところだろう。

王子と親父は剣を抜き、トウバンの兄貴とドクターは足幅を開いた。ここは一種の聖地だ。用もない人間が、いるはずはない。

「金髪紅目の若い男…おまえがマーデイルス王子か」

「だったら何だ」

藍の刈り上げが尋ねると、王子は突っぱねるように答えた。

「アンタレス様に命じられたのだが、竜血樹に秘密のようなものを見つけられなかったからな。おまえに聞くのが手っ取り早い」

言う刈り上げの手に下げられたのは、——紅蓮石^{シナバル}。

王子の紅い目が、見開かれた。ドクターとトウバンの兄貴、そして親父はきょとんとしている。親父はともかく、兄貴たちも石のことは知らないようだ。

紅蓮石^{シナバル}を持っているのは、王族だけ。今はふたつしかないはずだ。

ひつつは王子の首に下げられているのをオレも確認している。もうひとつは、というより今、刈り上げが示しているものはおそらく本来……

「父上に何をした!!」

普段からは想像のつかない形相で、王子が怒鳴った。同時に、男ふたりの背後の地面が割れて炎が噴き出した。

刈り上げと黒目は、炎の直撃を跳んでかわした。着地した刈り上げに、王子の剣がきらめいた。

「マルス！」

トウバンの兄貴が駆け寄ろうとするが、慌てて足を止めた。目の前には影のように黒いクマ型のキメラが群をなしていた。…さっきまでは、何もいなかったのに。

「召喚士か」

舌打ちして、トウバンの兄貴は自分の短刀に魔力剣をかけた。

「いかにも。おまえが盗賊“トウバン”だな」

黒目の黒フードが、一匹のキメラの上から見下ろした。

「人の名前をきくにはまず、自分から名乗るものよ」

親父の剣に術をかけ、ドクターも対峙した。

「アルクトウルスだ。女神官“ミラ”」

「オレの名はアルファルドという。覚えておけよ、マルス」アルカス」

「…さっきは王子って呼んだくせに、わざとらしいな」

おまえもデネボラも、と王子は下げた剣を諸手で構え、一気に刈り上げ…アルファルドとの間合いを詰めた。アルファルドの左わき腹から右肩にかけて、すくい上げるように振られた王子の剣は残念ながら、後ろに跳んでかわされる。

「残念だがな、マルス」アルカス。おまえは決しておれには勝てない“理由”がある」

アルファルドは右手で剣先を王子に向け、空いた左手の人差し指と中指を顔の前で立てて見せた。

「アクア・ナーガ
水の大蛇！」

アルファルドの周囲を突如、水の流れが渦巻いた。王子は踏み出そうとした足を止め、大きく後ろへ跳んだ。

しかし大量の水はアルファルドの指す王子の方へ向かっていく。

王子は魔力剣のかかった剣で、蛇の頭をかたどった水の流れの先を食い止める。水の勢いは凄まじく、踏ん張った王子の剣は押し戻されそうになるのをかろうじて耐えていた。

「確かに少量でも膨大なエネルギーを持つ“炎”というのは厄介だ」
アルファルドは剣を下げ、左手の指先を横に切った。するの蛇の首あたりから水の竜の頭がもうひとつ生まれた。

「だが弱点の水で押さえ込んでしまえば、そんなものは怖くないのさ」

「^{バージ}浄化！」

ドクターの術で、辺りのキメラたちが灰になる。しかしそれとほぼ同時に地面に光の魔法陣が現れて、そこから新たなキメラが出現した。

「きりがないな」

トウバンの兄貴はばやきながら、早くも術の切れ掛かった親父の剣ダイク・ブレイクに魔力剣をかけ直した。

「別におまえたちを倒せなくてもいいからな。アルファルドと王子のところへ行かせないようにするのがおれの役目だ」

ドクターが放った術は急に現れたクマのキメラに阻まれ、アルクトウルスまでは届かない。キメラはどろつとした黒い液体になって岩盤を変色させる。しかしまた新しいキメラの群が現れる。

「おまえらが組むと厄介だが、王子ひとりならアルファルドが何とかなでる。おれは一对一の土俵を崩さないようにすればいい」

「一对一ねえ…それにしちゃ、火に水とは単純だな」

二又の水の蛇をかわす王子をちらりと視界におさめ、トウバンの兄貴は呟いた。それに続いて、ドクターがわざとらしく嘆息した。

「あなたといいマルスの相手といい、マルスをなめすぎよ。水程度の力で、あいつの炎をどうにかできると本気で思っているの？」

「炎の渦か」

水の蛇をかわしながら唱える王子の呪文を、耳に挟んだらしいアルファルドが呟いた。

「おまえのオハコだったな。だがどんな強い炎でも、水で消火してしまえば意味はない」

アルファルドが、3匹目の首を生み出した。見ている気分はもう、やまたのオロチである。

「・・・。それは、普通の火の話だろ？」

王子は足を止め、迫り来る3匹の蛇の首を真っ直ぐに見つめた。剣を腰の鞘に収めると両手を胸の前で合わせ、術を発動させる。

フレイム・ヴォーテクス
「炎の渦！」

そして生み出された炎は、オレの予想をはるかに越えていた。

王子の生み出した炎は渦を巻き、まるで竜巻のような姿を現す。それがいくつもいくつも、それこそ数える余裕すらオレにはないほどだった。王子を追い詰めていたかのように見えていた水の蛇たちは、炎の熱で音を立てて蒸発した。

「どんな火でも水で消火してしまえば意味はない、と言ったな。アルファルド」

火の細い竜巻が1本、王子を取り巻いた。

「それは俺にも言えることさ。たとえ火の弱点が水だとしても、水が液体の状態を保ってられないほどの炎を扱えれば、俺にとって水は脅威じゃない」

炎の竜巻は天高く立ち上り、はるか頭上でひとつに合わさった。そしてまるで小さな太陽のようになったそれから、火力の増したさらなる竜巻が生まれ出された。

その竜巻は、地上の炎をよけることに精一杯のアルファルドやアルクトウルスと、運良くはじめの炎に巻かれなかったキメラたちを飲み込んだ。

そして…。

オレと親父、トウバンの兄貴はドクターが張った結界の中から、その様子を見つめていた。

「…こんな凄い炎を、操れるなんて」

王子の火による熱は結界の中までは届かぬはずなのに、オレの頬を汗が伝った。まるで…。

「化け物だろう」

トウバンの兄貴の声に、オレは兄貴を見上げた。

「魔導による火はその存在自体が魔導士の中では伝説に近いものなのに、堂々と炎魔導士を名乗り、少量でも絶大な破壊力を持つそれを惜しげもなく暴れさせる。…あいつは生まれついての化け物だよ」
炎が少しずつ、弱まってくる。乾いた岩場に吸収され、熱された空気に消えてゆく。

「マルスはただのヒトじゃない。それこそヒトの形をした、炎その

ものだな」

炎が消え、王子は息をひとつつく。それから振り向いたのを見てから、ドクターは結界を解除した。

* * *

「国王は“砂漠の鐘”の管理者じゃない？」

王子の発言にオレは、思わず声を上げた。

「ああ。だから父上は、この『聖域』の結界を紅蓮石シナバルで通ることはできても、竜血樹の秘密を扱うことはできないんだ」

王子はコケですべる岩場を越えると、苦戦しているオレに手を貸してくれた。オレはその手をありがたく借りて、岩を乗り越えた。

「しかしなぜ、国王ともあろうお方が…」

「管理の義務はすでに、俺が担っているからです」

霧で視界の悪い山頂に目をこらしながら問う親父に、王子は答えた。
「だからたとえ父上がいようと、奴らに竜血樹の力を使うことは出来ません」

「山頂に生える木、だったかしらね。竜血樹って」

トウバンの兄貴に手を引いてもらっているドクターに、ああ、と王子は頷いた。

「竜血樹は、こんな砂漠の真ん中で大きく枝葉を茂らせる不思議な木だ。この深い霧から貴重な水分を得ているらしいってことしか分かっていない」

先頭を進む王子が、やっと足を止めた。

そこに見えたのは、白い霧にぼんやり浮かぶ大きな黒い影だった。王子の合図でトウバンの兄貴が風を呼び、辺りの霧を吹き飛ばす。

「これが、竜血樹だ」

砂漠に大きな木なんて育たない。見えるのはどこまでも、砂の褐色ばかりの地と、乾燥しきつた青い空。それが砂漠の常識だと思っていた。

「だけどこの“竜血樹”は違った。

「でっけえ」

現れたのは、大きな大きな1本の木だった。その幹は1周するのに手をつないだオレが何十人と必要で、太い根は岩のような大地にしっかりと根付いている。葉は1本1本が針のようで、樹冠は傘のように広がって大きな空を覆っていた。

「山の上とはいえ、砂漠にこんな木が育つなんて」

ドクターも、親父も、いつもは顔に表情の出ないトウバンの兄貴さえ、目の前の光景に立ちすくんでいた。

そんなオレたちを置いて、王子はスタスタと竜血樹へ歩み寄る。

固まっていたオレらは一步遅れて、それに続いた。追いつくと、王子は広がった竜血樹の根の1本によじ登り、はるか真上を見上げていた。

「上に、木の実がひとつだけ成っているのが見えますか」

王子の言葉に、オレたちはそろって視線を上げた。あまりに高く、首は90°に曲げねばならない。

けれど王子の言うとおり、よく目をこらしてみると、ひとつ実がついているのを確認できる。色は緑色で、まだ熟していないのは明らかだった。

「竜血樹は10年に一度だけ実をつけます。今年はちょうど、その10年に一度の年なんです。でも今年は、以前と違って」

「違ってる？」

視線を上からおろし、トウバンの兄貴が王子を見て聞き返した。その声が合図のように、ドクターや親父も視線を戻した。

「実が、ひとつしか成っていない」

王子は根から下り、その大きな幹に左手を触れた。

「10年前、つまり俺が12歳のときは、オアシスに生えるヤシな

ど他の木と同様にいくつも実をつけていたんです。ひとつは王家に献上され、他はその年の祭りで国民へ振舞われました。民の10年間の安寧を祝い、10年後の幸福を願う。祭りの意義はそれが本来のものです。けれど、今年はひとつしか成っていない。父上や城の上層部も原因を探りましたが、結局まだ分かっていません」

王子はそこで振り返り、ひとつ問題を出した。

「なぜこの竜血樹が、ご丁寧^{ニナ}に結界まで張られて管理されているか。分かりますか？」

「え…と、貴重な木だから？」

オレが答える。しかし王子は首を振り、

「悪用されては困るからです」

その紅い瞳は、王族としての責任にあふれた鋭いものだった。

「赤い樹液は紅蓮石^{シナバル}の原料だし、竜の血と例えられるから神秘さもある。竜はもちろん、この地に伝わる“火竜伝説”を連想させます。その竜を王家と結びつけ、王家に神のような絶対性を国民に信じさせる。…普通なら、その程度しかないでしょうね」

…わざわざそう告げるってことは、そんなの意味にも入らないってことなんだろう。

「竜血樹の実。熟れば血のように真っ赤なものになります。そして日が経って乾燥すると、金属並みに硬くなるんです」

オレはもう一度上を見上げ、ひとりぼっちの木の实を見た。…普通の実のように見える。

「竜血樹の実がひとつを残して全て国民に振舞われるのは、祭りの意義をベールにして本当の意味を隠すため。つまり、実を世界にひとつだけの存在にするためです」

視線を実から王子に戻す。すると王子は、二度目の「王家の秘密」を口にした。

「たったひとつの実は、…“砂漠の鐘”の正体です」

えーと、うん。少し落ち着こう。

まず、砂漠の鐘が盗まれて王国が砂に埋まり、王子と一緒に旅をすることになった。これがほんの1ヶ月前のことだ。

それからキメラに襲われて、ドクターやトウバンの兄貴と合流し、デネボラって敵がいることを知った。うん、大丈夫。覚えてる。

そうしたら国王様が敵に捕まってるんだってことが分かって、竜^{ドラゴン}の眠る岳^{ピーク}に来て、王子がすげー炎の術を見せてくれて、竜血樹のところまで登ってきた。よしよし、分かってる。

で…、王子が竜血樹の秘密を教えてくれて。竜血樹の実が、砂漠の鐘なんだって言われたんだ。ってことは、盗まれた“砂漠の鐘”っていうのはつまり、10年前に収穫されたこの木の実ってこと？

だめだ。やっぱり分かんない。

「正確には、“砂漠の鐘”の内側の鈴にあたるんですよ。竜血樹の実でないと、なぜか砂の管理はできない。何か不思議な力を持った木であることは確かなんですが、残念ながら研究は思うように進んでなくて。ほとんど未知数です」

王子は、ぽかんとしているオレたち4人をほったらかして、またひとりで歩き出す。こっちはいろんな意味で置いてけぼりだったの。

「おう…」

オレは追いかけようと、呼び止めようと、声と同時に足を一步出す。しかしその足が、ずぶつと沈んだ。

「!?!」

反射的に、踏ん張ろうともう片方の足を出してしまった。それが裏目に出たのか、両足は地面に膝下まで埋まる。

「なっ…お、王子！ 親父!」

慌てて助けを求め、そこでやっとみんなが異変に気づいてくれる。しかしそれではすでに遅く、オレは胸まで、乾ききっているはずの

地面に吸い込まれていた。

「ルナーター!!」

王子が駆け寄ろうと、手を伸ばして走り出した。…オレが見たのは、そこまでだ。

完全に地面へ飲み込まれ、視界が真っ暗になる。手を伸ばしても、つかめるものは何もなかった。

「っはは。少年は貰っていくぜ」

黒のオアシスで聞いたあの声が耳に届いたのを最後に、オレの意識はなくなった。

第7幕 王国の秘密（前書き）

更新が大変遅くなってしまいました。
お待ちいただいた方には申し訳ありませんでした。

第7幕 王国の秘密

高い高い峰が見える。頂上は雲を貫き、浮いているようにも見えた。竜ドラゴン・ピークの眠る岳と呼ばれるその山を砂丘から見上げる人影が、3つあった。

「へー、これが噂の『竜の眠る岳』か」

「ラサリアド様、ご覧になるのは初めてなのですか？」

真ん中の男の眩きに、隣に立つ背の高い男が尋ねた。背中には弓矢がある。他のふたりと同じデザインのマントをまとい、フードとマフラで顔が見えなくなっている。

「話には聞いてたけど見たのははじめて。管理してるのはヘスペリデス王国だからな。今回は父様の命令で来たけど」

ラサリアドと呼ばれた男はそこで視線を下ろし、隣の弓矢使いを振り向いた。

「それで、アリー。マーデイルス王子はここにいるのか」

「王国も砂の下ですし、そうでしょう」

アリーと呼ばれた男が地図を仕舞いながら答えると、ずっと黙っていた3つ目の人影が口を開いた。ふたりよりも少々小柄だ。

「しかし命令の意図が読めません。なぜラサリアド様にそのような

……」

「まあまあ、ベガちゃん。父様にもいろいろあるんだって」

女の声で言う3人目をなだめ、ラサリアドはもう一度、竜ドラゴン・ピークの眠る岳を見上げた。

「じゃあまずは、王子様にアイサツしに行きますかー」

第7幕 王国の秘密

目が覚めると、石畳でできた灰色の空間にオレはうつぶせに倒れこんでいた。嫌に薄暗い。ここは、どこだろう。オレは鉛のような身体を起こした。頭も重い。

ええと、オレはどうしたんだっけ…？

「目が覚めたかね？」

聞き覚えのない声に、オレの心臓が跳ね上がった。

慌てて振り返ると、親父よりもっと年上の男の人が石造りの壁に寄りかかっていた。薄暗いのは確かだが、髪は白が多く混じった赤だということはある。…と、この人どっかで見たことあるような気がする。でも服装は汚れたシャツとズボンという格好で、思い出すための助けにはなりそうにない。

「え、えーと…」

「ここは檻の中だよ。君のような子どもまで連れてくるとは、奴らも手段を選ばんようだな」

檻の中？ やつら？

…はっ！

「そっ…、そうだ！ オ、オレってひとりでここに来たの？ 他のみんなは？」

「他のところへ入れられていたらわからんが…この中へは君ひとりだよ」

「そ、そっか…」

オレは思わずうつむいた。思えば王国を出てから、ずっと親父や王子が一緒だった。危なくなると必ず助けてくれた。でも今は王子も親父もドクターもトウバンの兄貴も、誰もいないんだ…。

いや、ダメだ弱気になっちゃ。オレは下を向いていた顔をあげ、

拳をにぎる。

オレが弱いことは、親父たちのほうがよく分かってる。気持ちまで弱くなっちゃ、本当の足手まといだ。せめて前向きでいなきゃ、あわせる顔がなくなっちゃう。

「ふふっ」

ふと笑い声がして、オレはそっちを振り向いた。

「や、すまない。ころころと表情がよく変わるのだな、君は」
な、失敬な！

抗議しようと口を開きかけたオレは、ふとそれを止めた。例のおじさんの、笑った顔。間違いなく見覚えがあるんだ。隠れた優しさとか、何かを悟ったような悲しみをほんの少しだけ含んだその表情は…
「あ！！」

オレは思わず声をあげた。

そうだ。オレはこの顔を良く知ってる。悪ぶってるけどまっすぐで、影があるけど暖かい。

「どうかしたか？」

不思議そうに覗き込んでくる、そのきょとんとした顔も。毎日見ていたあの人にそっくりなんだ。もしかして、この人…

「まさか…こ、国王様？」

おそろおそろ、尋ねてみる。するとあっさり返事は来た。

「その通りだが」

王子！ 親父！ 探し人はこんな所にいましたけども！！

「そうか、マーデイルスは元気か」

うつむき気味に、しかしほっとしたように、国王様は微笑んだ。カラーリングこそ違っているものの、表情の作り方は王子と同じだ。きつと王子も、年をとればこんな感じの渋い格好良さになるんだろうな。

「あいつのことだから、砂に埋もれずいるだろうとは思っていたが、君と一緒にだったのか。ええと…」

そういえば、まだ名乗っていなかった。

「あ、オレ、ルナータっていうんだ。ルナータⅡサテライト」

「サテライト？」

「近衛騎士団団長のイオⅡサテライトは親父です」

「なんと…サテライトの息子だったのか」

言われてみれば顔つきが似ているな、とまじまじ見られる。よく言われます…。

「親父と一緒にいるから、王子はきっと大丈夫だよ。王子も強いし」

「強い…か」

呟いて、国王様は憂いを含んだ笑みを浮かべた。

「妻の血を引いたマーデイルスは、本来ならばもつと強い男に育つべきだったのだろうな。…過保護になった私の責任だ」

「過保護？」

オレは首を傾げた。王子の口ぶりじゃ、どっちかっていうと放任主義って感じがしたけど…。過保護なのは、当時の大臣じゃないのか？

「当時の大臣に、マーデイルスをしっかり見るよう言いつけたのは私なのだよ。…ヘスペリデス王家の人間は、炎の加護を受けているから」

炎の加護。それは、扱う炎の術と王子の腕前を見ればそうとれるだろう。っていうかあの王子の魔導の強さはどう見ても異常だし。

「正直なところ、私は妻も早くに亡くしてしまっただけから。臆病になっちゃったのかもしれない。…おかげでマーデイルスにも、寂しい思いをさせてしまった」

「あ…、王子も言ってた。小さい頃にお母さんが死んじゃったから、あんまりよく覚えてないって。最初に思い出すのは決まって子守唄だって」

「そうか。あの唄を、覚えていたのか」

王子のお母さんは、絵画で一度だけ見たことがある。国王様が落と

したロケットの中に入っていたやつだ。少しふつくらしていて、童顔だけど優しそうな人だった。

「妻は…シュリアーナは、花のように可憐な可愛らしい女だったよ。しかし…」

しかし？

「…見かけと中身が大きく違ってなあ」

「——は？」

オレは思わず、間の抜けた声で聞き返した。

「血の気の多い、熱い女だった。魔導も得意でな、追い回していた私はよく、頭を焦がされたよ…過激な性格だった」

なるほど。王子のあの性格は、母親譲りだったのか。苦笑いするオレの顔を見て、国王様も笑った。

「なぜだろうな、君が相手だといひ何でも喋ってしまふよ。・・・」しかしその笑顔は、すぐに引っ込んだ。

重い扉の開く音と同時に、足音がこちらへ向かってきた。

「ルナータくん、下がっていなさい」

国王様は自分のうしろにオレをやり、檻の外を警戒する。

さつきちらりと見た感じだと、ここはどこかの地下牢のようだった。といつても、オレと国王様が入ってる牢の正面と両脇の牢屋はキメラが入れられていて、いくら頑丈そうなつくりとはいえ、いつ襲われても不思議ではない。向かって右手は突き当たりの壁だが、左には鉄の扉がつけられていた。おそらくそこから、誰か入ってきたのだろう。

「そんなに警戒しなくても、おれがあんたに危害を加えたことはないだろ？ 国王」

聞こえてきたのは、あの声だった。

竜の眠る岳でオレをさらい、黒のオアシスで王子を挑発していた声だ。全身を漆黒の神官服で包み、剣技で王子と渡り合う、あの男だ。

「よう少年、久しぶりだな。マルス＝アルカスは元気か？」

見下すような目を向けてきたのは、予想通りの男だった。

「——デネボラ！」

オレはその名を叫んだ。

つかまってから何があったのか、オレは知らない。王子たちのことだから、やられるようなことはないだろうけど……

「そう怖い顔するなつて。おまえをさらって来ただけで、あいつらには手を出していないぜ」

右手を腰に当て、デネボラは言う。信用なるもんか。

「もつとも、奴らはここに向かってきているけどな。大事にされてるなあ、少年」

「へんだ、おまえとは違うんだよ！」

デネボラに、あかんべをしてやった。何かしたらただじゃおかねー！

「言っておくがな、少年。おまえは王子たちを呼び出す“エサ”だ。エサはエサらしく、大人しくしておけよ。五体満足でいたかったらな」

ドラゴン・ピーク

「……だったら、竜の眠る岳でケリつければ良かったじゃないか」

「大人には大人の事情があるんだよ。なあ、国王」

腕を組み、不敵な笑いを浮かべながら、デネボラは視線を国王様へと移した。おいこら、オレとの話が終わってねえだろ！

ドラゴン・ピーク

「竜の眠る岳へ、行ったのか」

「おまえの息子はしぶといな。5年かかってやっと尻尾を掴んだと思ったのに、さらに5年がかかっても未だにトカゲの尻尾きりだ。

……ま、それももう終わりだがな」

さつとマントのすそをひるがえし、デネボラが視界から消えた。檻の前からはなれ、出て行くつもりなんだ。

「……んの、待てデネボラ！」

オレは国王様の後ろから飛び出し、檻の柵に両手をかけた。

「王子たちに手え出したらオレが許さねえぞ！ 王子に砂漠の鐘を返して、王国を戻せよ！ 王子は悪いことなんて何もしてねーだろ！ これ以上、王子から大事なものを奪うなよ！！」

「大事なもの？」

デネボラは、出入り口をすぐ前にして立ち止まった。こちらを振り返ると、

「そんなもの、持つてる方が悪い」

笑い飛ばし、吐き捨てた。

現れた時と同じく、扉は重い音を立てて閉められた。残ったのは扉と同じくらい重い空気と、檻の中で歩き回るキメラの足音とうなり声だ。

「ルナータくん」

しばらく経ってから、先に口を開いたのは国王様のほうだった。

「君は、私の知らないマードイルスを知っているだろう」

「・・・」

「すまないが、教えてくれないかね。王国が砂に飲まれてから、何が起こったのか」

「・・・」

オレの頭の中は「どうしよう」の5文字しかなかった。

どうしよう。話した方がいいのだろうか。でも5年間、ドクターとトウバンの兄貴が守ってきた王子の自由を、ここでオレがばらしていいのか。

だけどオレは、砂漠で親父と話したことを思い出した。あの親子は、もつとちゃんと話をするべきだって。すれ違ったまま戻れずにいるって。

それに国王様の目は、真剣だ。息子を分かつとする父親だ。親子喧嘩をするときに、うちの親父が見せるのと同じだった。

「あの・・・」

オレは国王様の正面にちまっと正座して、おそろおそろ切り出した。

「王子のこと、怒らない…?」

正直、どこまで話していいか分からなかった。

だから王子にドクターとトウバンの兄貴っていう友だちがいて、今も一緒に行動していること。死んだ仲間がいること。5年間対立している組織のひとりが今のデネボラであることを話した。

炎の術と剣の腕が凄いことも話したが、恋人がいたことまでは伝えられなかった。それはもし話すなら…王子自身であるべきだろうと思うから。

…どれだけ時間が経ったのか、時計がないから分からない。窓もないから、太陽の動きも計れない。そもそも今は、昼なのだろうかそれとも夜?

国王様はその間ずっと、黙ってオレの話を聞いていた。

「そうか…」

オレがやっと話を終え、沈黙が落ちると。国王様はやっと、口を開いた。

「少し、安心したよ」

国王様は、優しく微笑んだ。

え…、安心? 心配じゃなくて?

「マーデイルスは、誰より王子らしい王子に育ってしまった、思っていたからな。それが心配だったのだが、取り越し苦労で良かった」

「ど、どうして?」

「…一生を王子として過ごすなら、アイドルでも飾りでも構わない。しかし、王になる時というのは必ず来るからな。そのとき、飾りの王子様のままでは困るのだよ」

あ…、そうか。

王になるというのはつまり、国民全員の上に立つということだ。

自分で判断し、時には残酷な決断も下さなければならぬ。

「しかしマーデイルスは、しっかりと妻の強さを引き継いでいたのだな。私の知らない間に」

寂しそうに、けれどとても嬉しそうに、国王様は微笑んだ。

「そうと知っていれば、とつくに王位を譲っておったのだがな」

「え？」

「本当は、マーデイルスが20歳になったときに王位を譲るつもりだったのだ。しかしマーデイルスが猫をかぶっていることなど気づいていなかったからな、心配でどうも踏み切れなかったのだ」

ハタチ：「そうか、王子が成人した年ってことが。」

「でも、何でそんなに早く？ 国王様だって、まだまだ現役でいけるでしょ」

「私は、王にふさわしくないからな」

ふさわしく、ない？

「ルナータくんは、“砂漠の鐘”が盗まれたことも知っていたな」しかしオレが疑問を口にするより先に、国王様はうつむきかけていた顔を上げて話題を変えた。

「なぜ、それがヘスペリデス王国の管理下にあるのか分かるか？」

慌てて頷くオレに、国王様はさらに質問を重ねた。オレは眉をひそめ、

「なぜ、って？ ヘスペリデスが、砂漠で一番の大国だからじゃないの？」

「ではヘスペリデスが、砂漠一の王国になったのはなぜだ？ 竜の眠る岳があるからか？ ならばなぜ砂漠の五大国の大神官によって封印されたのだ？ 竜血樹があるからか？ そうだとすると、他国と奪い合いの戦争が起こっても不思議ではない。しかしどの歴史を見ても、大戦があつた記録は一度もない」

立て続けに疑問点をあげる国王様だが、オレに答えられるわけもない。オレはただ黙って、国王様を見つめるしかなかった。

けれど国王様はオレと目が合うと、ふっ…と微笑んだ。

「本当ならマーデイルス本人に話してやりたかったのだがな…私に何かあれば、真実を知る者はこの世から消えてしまふ。それだけは避けたくてな」

ぼん、と国王様の右手が、オレの頭に乗せられた。王子と同じ、暖かい手だ。

「子どものキミにこんな話をするのも気が引けるのだが…ルナータくん、もし私がマーデイルスに伝えられなくなることがあったら、代わりに教えてやってくれないか。ヘスペリデス王国の秘密を」

「王国の秘密？」

国王様の手が離れてから、オレは尋ね返した。国王様はゆっくりと頷いた。

「ヘスペリデス王国に、“砂漠の鐘”の管理を一任した理由。それはヘスペリデスの王族が、最も強い力と血を持った一族だったからなのだ」

そして国王様は、オレに話してくれたんだ。ヘスペリデス王国が…いや、この大砂漠全土に関わる重要な秘密の歴史を。

ねえ、王子。オレ、思うんだ。

栄華を極めたヘスペリデス王国が鐘ひとつで崩壊してしまったのは、神様がどうしようか迷っていたからなんじゃないかなあ…つて。国民の誰かでも、大臣でも、国王様でもなくて、砂漠の鐘の管理者が王子なのは、王子が一番強い力を秘めていたからで。

だから神様は、強すぎる力がある王子を試しんじゃないのかな。

王子は自分の力をコントロールして良い砂漠をつくってくれるか。それとも制御がきかずに暴走させて滅んでしまうか。

きつと神様も、王子の力が怖かったんだよ。

でもさ、王子。

オレは王子が大好きだから。王子がどんな答えを出してもそれは間違っていないと思うから。

だからオレは、ずっと王子の味方だよ。オレだけじゃない。親父も、ドクターも、トゥバンの兄貴も、国王様も…きつと、死んだマリアナさんとツアイさんも。

だから王子、負けないで。

デネボラに。黒の組織に。神様に。世界に。

そして誰より、王子自身に――。

第7幕 王国の秘密（後書き）

今話で第1章は終了です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3258s/>

砂漠の鐘

2011年10月7日02時26分発行